

VIEW21

特集

主体性を育む生徒指導

——他者への意識を高めて、生徒の「気付き」を待つ

新課程
教科指導最前線

国語、地歴・公民◎充実が求められている言語活動を授業にどう取り入れるか

指導変革の軌跡

統一した指導の実現◎大阪府立槻の木高校
進学実績向上◎沖縄県立読谷高校

生きたデータの
徹底研究

2年生0学期の意識付け

2013
December

12月

高校版
Volume

5

2 私を育てたあの時代、あの出会い

己をあらわにぶつかることで教師の幹を少しずつ太くした
奈良県立奈良高校◎四方敏幸

4 特集

主体性を育む生徒指導

—— 他者への意識を高めて、生徒の「気付き」を待つ

6 座談会…… 生徒指導を通して「気付く力」を獲得させ、
変化を生き抜く主体性を育む

茨城県立土浦第一高校◎臼井健司

千葉県・私立芝浦工業大学柏中学・高校◎早川千春

山口県立下関西高校◎大塚睦之

10 私の生徒指導1 他者や社会とのかかわりの中で自分のあり方を考えさせる

山梨県立甲府南高校◎三枝正人

12 私の生徒指導2 集団の中での役割を意識させて主体性を引き出す

愛媛県立三島高校◎高田潤哉

14 学校事例…… 綱領をよりどころに教師間で指導を共有し、
生徒に高い志を持たせる

青森県立八戸高校

18 新課程 教科指導最前線

国語、地歴・公民 充実が求められている言語活動を授業にどう取り入れるか

国語 神戸大学附属中等教育学校◎読む、書く、話す、聞くなど言語活動を総合的に取り入れ表現力や思考力を鍛える

地歴・公民 長崎県立佐世保北高校◎アクティブ・ラーニングで学習内容を効果的に定着させ、主体的な学びの意欲を引き出す

24 指導変革の軌跡

24 大阪府立槻の木高校

統一した指導の実現◎分掌中心の「4室体制」で学習指導と生活指導を両輪とした指導を実現

28 沖縄県立読谷高校

進学実績向上◎進路意識の醸成と模試の徹底活用で生徒を高い志へと導く

32 生きたデータの徹底研究

2年生0学期の意識付け

36 半歩未来を考える教育オピニオン

技術革新で激変する未来社会を生き抜く力とは

国立情報学研究所情報社会相関研究系教授、社会共有知研究センター長 新井紀子

40 未来をつくる大学の研究室

全国の学校の取り組みを分析し、子どもの学力を高める方法を追究

大阪大大学院 人間科学研究科 志水宏吉研究室

44 VIEW'S REPORT

グローバル化時代の人材育成を考える②

異文化と協同する力を育み、郷土への誇りを醸成する

高知県・私立土佐塾中学・高校「高知元気人プロジェクト」

グローバル化時代の人材育成を考える③

スーパーグローバルハイスクールで育成を期待する人材像とは

56 Reader's VIEW

*本文中のプロフィールは
すべて取材時のものです。
また、敬称略とさせていただきます
*本誌記載の記事、写真の無断複製、
複製および転載を禁じます

今、振り返る教師としての原点

私を育てた
あの時代、あの出会い

己をあらわにぶつかることで 教師の幹を少しずつつ太くした

奈良県立奈良高校

四方敏幸しかた

教師のひと言が生徒のその後を大きく変えることは決して珍しくない。だが、どれだけ用意周到であっても、教師の想定通りに事が進むとも限らないのも事実だ。生徒とぶつかり、失敗と成功を重ねながら成長する道を選んだ四方先生の覚悟を振り返る。

「生徒に遠慮するな」



新任で奈良県立郡山高校に赴任し、小林勢治先生のクラス

9歳年上の小林先生は当時33歳。生徒と気軽に言葉を交わしながら厳しさも忘れないその姿勢に、「私もこんな教師になりたい」と心から思いました。郡山高校の生徒はとても素直で、私の授業にも真剣な態度で臨んでくれました。生徒はついてきてくれている……私はそう思っていました。ところが2学期のある日、私は笑顔の小林先生に声を掛けられたのです。「遠慮しないで、もっと自然体で生

徒に接したらええのに。生徒もそう言うとするで」。正直、最初は小林先生の言葉を素直に受け入れることは出来ませんでした。しかし、冷静にそれまでの自分を振り返ってみると、生徒との関係を円滑にしたいあまり

に、生徒に気を使い過ぎていたことに気が付いたのです。確かに私は、「この言い方なら生徒はちゃんとやってくれるだろう」と考えてから、生徒にひと声掛けていました。生徒に真摯に向き合っていたものの、生徒からの反応を楽しむような余裕もなかったのです。

小林先生のひと言をきっかけに、私は「郡山高校のような学校では、用意周到でなくてもいいから、もっとストレートに思

いぶつけた方が、生徒からいろいろな反応があり、コミュニケーションが豊かになるのかもしれない」と考えるようになりました。そして、いつの間にか自分の気持ちが無くなっていくことに気が付いたのです。

衝突が絆を強くする

その年の文化祭では、1年生9クラスの中で、小林先生のクラスが正門を飾るアーチの製作を担当することになりました。それは文化祭の顔をつくるとても大切な役割です。

副担任の私は、生徒と一緒に頑張って作業に汗を流しました。小林先生は、時折生徒にアドバイスするくらいでしたが、時間の経過と共にクラス全員に役割

が生まれ、協調性のある集団になっていくのが手に取るように分かりました。教師の存在を過度に感じさせず、しかし生徒を確実に変えていく働き掛けなど、クラス運営のあり方を学ぶ貴重な機会になりました。

文化祭に対する生徒の情熱は格別でしたから、時には衝突もありました。実は私も、リーダーの生徒とかなりもめてしまいました。彼らがよかれと思ってやっていたことに、私がストップをかけたことが原因です。生徒の言い分もとてもよく理解できましたから、どう説明すれば彼らに分かってもらえるだろうかとずいぶん悩みました。

生徒との関係がしっくりしないまま文化祭当日を迎えまし

先輩教師の言葉

失敗と成功を
積み重ねることなしに
幹は太くならない

奈良県立奈良高校 校長
小林勢治せいじ



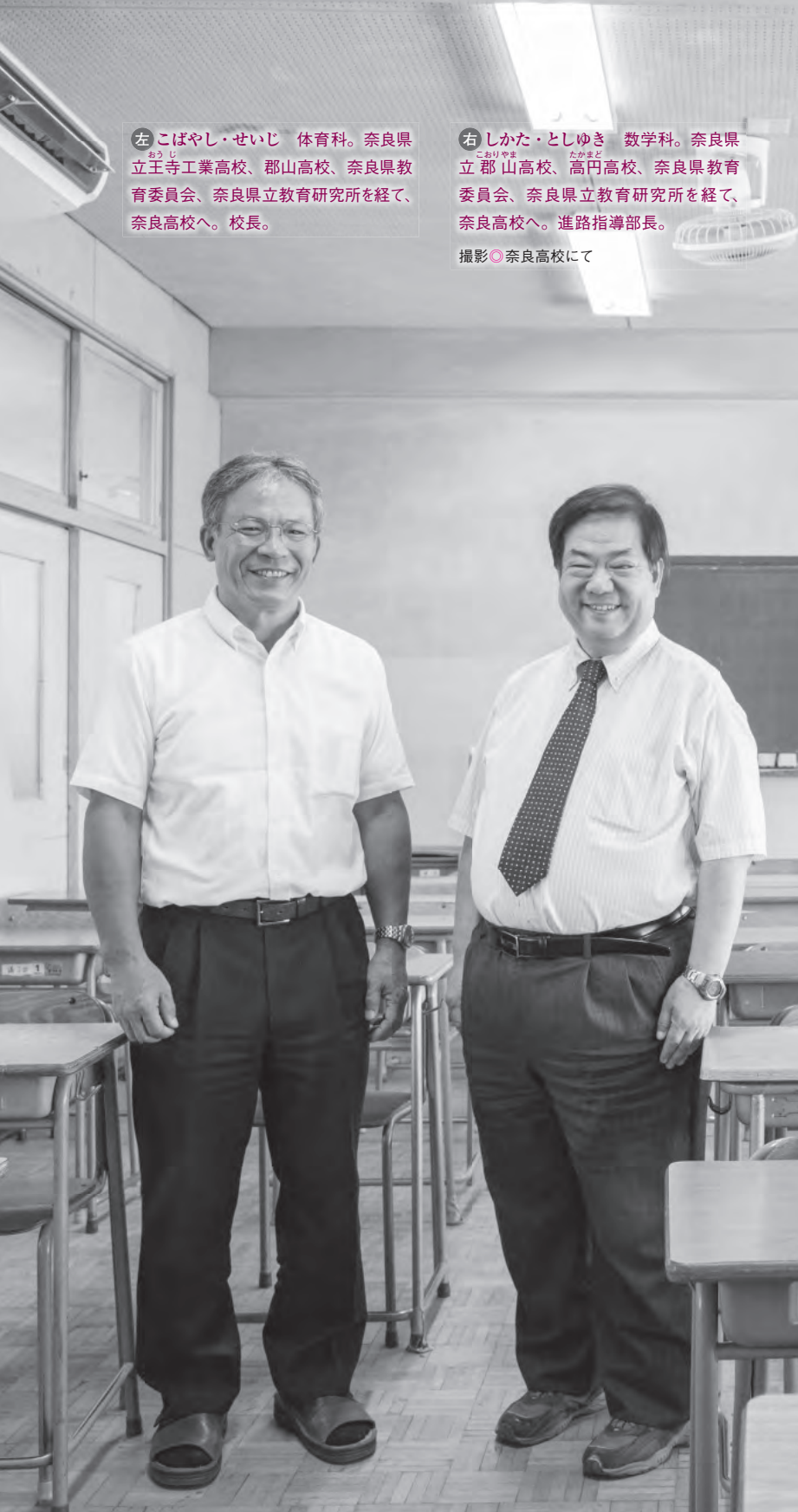
四方先生に「遠慮するな」と言ったのは、「四方先生には思ったことを言ってもらいたい」という生徒の言葉を聞いたからです。郡山高校の生徒は1年生でも結構大人ですから、四方先生が遠慮していることを感じ取ったのでしよう。また、担任の私が、ずけずけとものを言うので、そのギャップもあったかもしれませんが、ともかくそれ以降、四方先生は変わりました。

生徒とのかかわりは静かな水面に石を投げる行為と同じです。波紋を起こすことで水質や深さなどが分かれます。自分をあらわにしてぶつかって、教師は生徒を真に理解することが出来るのです。私も、「別の言い方、接し方が

左 こばやし・せいじ 体育科。奈良県立王寺工業高校、郡山高校、奈良県教育委員会、奈良県立教育研究所を経て、奈良高校へ。校長。

右 しかた・としゆき 数学科。奈良県立郡山高校、高円高校、奈良県教育委員会、奈良県立教育研究所を経て、奈良高校へ。進路指導部長。

撮影◎奈良高校にて



た。出来上がったアーチを生徒と一緒に眺めた時は本当に感動しました。その後、生徒との関係は破綻するどころか、むしろより強固になりました。そして生徒を信じていることが出来るようになったことで、私も授業やSHRをこれまでよりずっと楽しめるようになったのです。あの衝突は生徒と私にとって、しんどかったけれども必要な経験だったのだと思います。

あれから25年以上が経ちました。小林先生とはその後、教育委員会、そして今は奈良高校で一緒に働かせてもらっています。今の私は、校内の意見をまとめる役目も多くなりましたが、校長である小林先生からは、「周りに気を使い過ぎや」とよく言われます。ズバリと指摘されてドキッとすることもありますが、

すが、はっきりと言ってくださるからこそ、私は小林先生の前では安心して自分を出せるのです。自分の性格を変えるのは簡単ではありませんが、それでも私は「小林先生のようになりたい」と今も強く思います。

話すことです。「もっと早め先生方にお願ひすべきだった」などと反省を隠さずに話すと、若い先生も意見を言ってくれます。きっと、私の失敗を自分に置き換えて考えてくれているのでしょう。「一生涯命になるほど、反省もたくさんありますが、それは私が後輩に渡せる財産であり、それがあつた限り、私はまだ成長できると信じています。

あつたかも」といった反省はあります。しかしそれでも、教師は失敗を恐れず、機を逸することなく石を投げ続けなければいけません。生徒の反応を直に感じることは、教師としての至らなさに気付く機会にもなるのですから。

私は、若い先生が「失敗しないハウツー」を欲しがることが気になります。まず教育観、幹をつくってほしいのに、一足飛びに「どうしたらよいか」と聞いてくる。ハウツーは幹に付く枝葉に過ぎないこと、幹は失敗や成功を重ねないと太くならないことに気付けるかどうかで、教師としての成長は違ってくる。そうした気付きは、先輩との出会いが与えてくれるものです。

四方先生の遠慮は、周囲に対する配慮です。しかし、配慮し過ぎてアクションが遅れるのはいけません。行動を起こす前には配慮はしてよいけれど、アクションを起こすと決めたら、あとは躊躇せずに走る。だから「石橋を叩いていいのは一度だけやで」と四方先生によく話します。

性格はなかなか変えられませんが、自分をコントロールすることは出来るはずで、私たちはプロなのです。

主体性を育む 生徒指導

——他者への意識を高めて、生徒の「気付き」を待つ

時代と共に変化する生徒の気質や意識。

グローバル化が進む現代社会において主体性が求められている一方で、

最近の生徒は、「素直ではあるが、受け身」「他者に対する想像力が弱い」といわれている。

そのような気質・意識の変化に対して、どのような指導をすれば、生徒の主体性を育めるのか。

今号は「生徒指導」の面から、主体性の育成について考えていく。

Q ここ数年での生徒の気質・意識面の変化を教えてください

◎生徒は、ボランティア、部活動などに積極的に参加し、学びに対しても、ある程度のレベルまでは取り組み。しかし、何か覇気が感じられない。大きな夢がないというか、背伸びしないというか。主体性がないわけでもなく、明るく元気だが、何か冷めている感がある。自分はこの程度で……という限界を設定し、その中で普通に生きることに満足しているように感じてしまう。(宮城県)

◎肯定的に見れば、優しく、従順で、無邪気になっているといえるが、「強さ」が不足している。保護者も学校も、子どもがつまりずくことのないように、大事に守って育ててきている影響ではないか。(千葉県)

◎「教師の指導・助言を待つ」という受け身の姿勢が強いと思われる。自ら考え工夫して行動するということが出来ないようである。

(香川県)

◎素直な生徒が増えたが、自分で道を切り開いていく気概を感じられる生徒は少なくなった。(山口県)

◎「徹底する」「こだわる」といった点が弱くなり、あらゆることに関する興味・関心のレベルが低くなっているような気がする。勉強だけでなく、友人関係、部活動、進路など、他人事でも生きられる世の中になっていることが問題だと思う。(静岡県)

出典／「VIEW21」高校版読者モニターへのアンケート結果より。アンケートは、2013年8月にウェブとフリップで実施。有効回答数は61

本号のテーマ

生徒の気質や意識、そして社会環境が変化する中で、 主体性を育むために必要な生徒指導とは？

生徒の気質・意識の変化

- 素直であり、言われたことはきちんとするが、それ以上のことをしようとしていない
- 自分の言動が他者にどのような影響を与えるのかを想像する力が弱い
- 頑張ったことに納得してしまい、目標が達成できないことを悔しがらない など

グローバル社会

答えが1つとは限らない
不確実性の高い社会

今、求められる、主体性を育む生徒指導とは

座談会 [P.6~9]

- 他者と協同できるよう、他者意識を高める
- 課題やその解決策を自ら見付けられるよう、生徒に考えさせるきっかけや機会を与え、生徒の「気付き」を待つ



茨城県立
土浦第一高校
臼井健司



千葉県・私立
芝浦工業大学
柏中学・高校
早川千春



山口県立
下関西高校
大塚睦之

教師個人として、学校全体として、どのように実践するか

教師個人として

私の生徒指導 [P.10~13]

- 授業中のグループ活動で視点の多様性に気付かせる
- 学習方法の悩みの解決法などを生徒同士でアドバイスし合わせ、共感と感謝から他者を思いやる心を育む
- 自分の夢や進路をクラスで発表し合うことで、他者理解と自分のあり方を考え直すことを促す
- 学校行事や部活動、課外活動などで生徒同士が意見を述べ合う場を多く設定し、集団の中での自分と他者の役割を理解させる
- 教師が日常的に生徒とコミュニケーションを取り、本音で向き合う など



山梨県立
甲府南高校
三枝正人



愛媛県立
三島高校
高田潤哉

学校全体として

学校事例 [P.14~17]

- 校訓や綱領などをよりどころに、教師間で主体性を育む生徒指導の統一を図る
- 日常的に教師間の連絡を密にし、生徒についての情報共有をこまめに行う など

青森県立八戸高校

生徒指導を通して 「気付く力」を獲得させ、 変化を生き抜く主体性を育む

「素直だけれど、受け身」「程々で満足する」など、生徒の気質の変化が指摘される中、高校における生徒指導は今、何を主眼に置こうとしているのか。グローバル化、デジタル化など、著しい社会環境の変化を生きるために必要な生徒指導を、3人の高校教師がそれぞれの日々の体験を踏まえて語り合う。

一見「素直」な生徒に 今、他者意識が必要

白井 最近、生徒指導に占める規範指導の割合が小さくなったのは事実です。以前は、本校にも若者らしい反骨精神を持った生徒が存在しましたが、他の進学校同様、そうした生徒はほとんどいなくなりました。若いエネルギーゆえの逸脱も許さないと、社会全体が萎縮しているのだからかと考えることがあります。

早川 社会では、「難関大学に行く

だけでは意味がない」「出来る人だけではなく、出来ない人にも存在価値がある」といった言葉があふれています。それが正論であることは大人の私たちには分かっていますが、子どもたちには分かっています。どうすればいいのか、どのように自分を表現すればいいのかが見えにくくなっているのかもしれない。1つの軸だけで人を比べる社会は不幸ですが、どの軸でもはつきりと比べてもらえない社会も若者にとっては生きにくい社会です。だから生徒はどの場面でも目立たないようにして

いるのだと私は思います。

大塚 「目立ってはいけない」という意識は、志望校選択でも感じます。成績が良い生徒でも、志望がすぐく控えめなケースが最近は少なくありません。自分の人生に対して冒險する気持ちが弱いような気がします。だから、教師が面談などで「高い目標を掲げることの意味」を説明し、背中を押してあげないといけません。今の生徒は素直だけれど手が掛かるという認識は、多くの学校に共通のものではないでしょうか。

早川 素直さの度が過ぎると思うこ



茨城県立土浦第一高校

白井健司 うすい・けんじ

教職歴35年。同校に赴任して13年目。進路指導部副部長。担当教科は生物。

茨城県立土浦第一高校◎1897（明治30）年創立。13年度入試では、国公立大は、東北大、筑波大、東京大、京都大などに187人が合格。私立大は、慶應義塾大、明治大、早稲田大などに延べ531人が合格（現浪計

ともあります。以前、校則に違反した生徒を論していたら、「自分が悪かったのは分かるけれど、もしかしたらまた違反してしまうかもしれないから、もうしませんと言う自信がありません」と言われました。「それを言うてはおしよだよ」と言いなくなるくらいの素直さなのです。

白井 素直なのだけれど、こちらの言葉が心に染みている気がしないのですよね。注意したその時には素直



千葉県・私立芝浦工業大学柏中学・高校
早川千春 はやかわ・ちはる

教職歴20年。同校に赴任して21年目。進路部長。担当教科は国語。

芝浦工業大学柏中学・高校◎1980(昭和55)年創立。13年度入試では、国公立大は、東北大、東京大、千葉大などに62人が合格。私立大は、慶應義塾大、芝浦工業大、東京理科大学、早稲田大などに延べ929人が合格(現浪計)

に返事はするけれど、また繰り返す。なぜ注意されているのかを深く考えず、聞き流すことで自分を防御しているような気すらします。

大塚 紛失や忘れ物など、自分の不注意で他人に余計なひと手間を掛けた時に、「ありがとうございます」のひと言がずっと出ない生徒も確かにいます。感謝のひと言が出てこないのは、他者に対する想像力が弱いのだろうかと考えてしまいます。

白井 他者への影響を想像できなくなっているのでしょうか。だから、「遅刻をする人がいると授業の開始が遅れ、他の人たちの勉強時間が短くなってしまう」などと、他人に手間や迷惑を掛けていることをかみ砕いて説明することが必要になっていくように思います。

早川 他者意識を高め、生徒の気づきの度合いをどう上げていくかは、生徒指導における大きな課題だと思います。「自分の言動は周囲の人たちにどのような影響を与えているのか」を自然に考えるような工夫をしていかなければなりません。

答えが1つではない問題に
向き合う力を生徒指導で養う

大塚 他者意識が育めるのは、行事や部活動など、目的に向かって切磋琢磨する場でしょう。勝つためには自分1人の努力では駄目だし、かといって仲良くしているだけでは勝てないことにも気付くはずですから。

白井 他者意識は学力とも密接に関



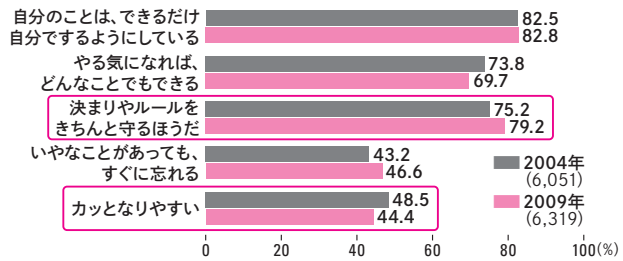
山口県立下関西高校
大塚睦之 おおつか・のぶゆき

教職歴23年。同校に赴任して13年目。進路指導部部长。担当教科は数学。

山口県立下関西高校◎1920(大正9)年創立。13年度入試では、国公立大は、東京大、京都大、山口大、九州大などに145人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ325人が合格(現浪計)

資料◎「いい子」化が進む高校生

Q. あなたは、自分自身について、次の項目にあてはまるようなことはありますか



*調査対象は高校1・2年生。()内はサンプル数。
*「とてもそう」+「まあそう」の%。*項目は一部を抜粋。
出典/ベネッセ教育総合研究所「第2回 子ども生活実態基本調査」(2009)

係していると思います。東京大などの難関大学の志望者に対しても、「課外授業でひたすら教える指導だけでは成果は上がらない」というのが本校の共通理解です。進学指導の経験が豊かな教師ほど、高い志望目標の達成には、生徒は、自分で勉強する力を身に付ける必要があります、それは学習活動だけでなく、行事や部活動なども含めた総合的な活動を通して

育めるものだと考えています。

大塚 勉強だけでなく、部活動や行事も頑張るのは大変ですが、そうした状態に身を置くことは、自分を理解し、これからどう生きていくのかを考える機会になると思います。部活動や行事の中で限界にチャレンジすることで、自分の能力や考え方を知ることが出来ますし、挫折からどう這い上がるのかも学びます。そうした一連の経験から自分だけでなく他者への理解も深めていく……それが高校の生徒指導だと考えます。

早川 高校は、他者と協同する力を身に付ける場だと思います。価値観の異なる人と協力する、課題を自分で見付けて、その解決策を考えるなど、これからの社会で求められる力を養う機会を、学校がどれくらいつくれるかが問われていると思います。それは、「グローバル化だから英語、ICT……」とスキルを細分



「他者と協同する苦労や
充実感を授業の中で生徒に
味わわせたい」 白井



「生徒が主体的に活動できる
工夫、ノウハウを校内で
共有したい」 早川

化することだけではありません。環境変化の激しい時代を生きるために、どんな状況にも適応できる力、答えが1つではない問いに向き合う胆力を養う場が必要です。

白井 そうした力の育成を、私たちは授業でも強く意識すべきだと思います。実験で失敗したような時は、なぜうまくいかなかったかを仲間と一緒に考えるような経験を学校で積ませることが、グローバル社会に向けての教育には必要だと感じます。

大塚 部活動でも同じですよ。野球部員は皆野球が大好きですが、全員がピッチャーで4番になれるわけではありません。好きな世界で充実

した時間を過ごすためには、いろいろなポジションを守れるように練習したり、試合に出なくてもチームに貢献する方法を考えたりすることも必要です。部活動においても、「素振りをして1000回やればうまくなる」など、答えが明確なことはわりではありません。問いも答えも自分で見付けなければいけないということとを、部活動の中でどれだけ意識させられるかも、生徒指導で教師に求められる力量なのだと思います。

早川 集団の中にはついてこられない人もいるわけで、そうした人を叱咤激励し、集団の力を高めていく時にも他者意識が必要不可欠です。

白井 利害を巡って生徒同士が衝突する場面も大切にしたいものです。例えば、生徒会の予算折衝や文化祭の運営などの議論を見ると、生徒の成長を強く感じます。生徒の不満が出ないように、教師が予算を配分し

てやるようなことは、生徒の成長の機会を奪うことと同じです。

大塚 生徒を仲良しグループに閉じ込めてはいけませんよ。勝てる部は、やはり部内での競争が厳しい部です。ただ、レギュラーと控えの間の溝が深くなると、とたんに勝てなくなるのも事実です。だから、競争と思いやりの両方が必要だということに気付かせたいのです。

白井 授業でも、他者と協同するからこそその苦労や充実感を可能な限り味わわせたいですね。実験なども、特定の生徒が頑張つて他の生徒は傍観していれば済むような進め方ではなく、一人ひとりがしっかりと動かないと全体が進まないような構成が必要だと思います。部活動でも授業でも、学校が常にグループで動いていることを最大限に利用するように、私たちはもっと指導技術を磨かなければなりません。

早川 デイベートなどでも、相手グループからの質問は指名で行うようにして、チーム全体の理解度と回答力を得点化するなど、全員が意欲的に参加する仕掛けをもっと考えたいと思います。そういった工夫を教員



間で共有し、生徒が主体的に活動できるノウハウを校内で蓄積することを、もっと意識したいと思います。

教師が声を掛け続けながら変化を待つ

大塚 私が最近、気になるのは、勝てなかった時、うまくいかなかった時にあまり悔しがらない生徒がいる

ことです。

早川 きっと「夢はかなわなくても頑張った」と納得するからでしょう。頑張ったことだけで納得させないためには、絶対達成したい目標、これなら出来るかも、という目標を言語化することが大切だと思います。

大塚 目標を適切に設定し、振り返る場は確かに必要ですよ。例えば、本校の野球部にも日誌があります。最初はただその日の練習を記録するだけです。でも、続けるうちに自分の考えや課題、計画を書く生徒が増えていきます。文字にすることで頭の中が整理され、記録だけでは駄目だと気が付くでしょう。

早川 まさに生徒が自立をするための機会ですね。本校の生徒は共通の手帳を活用してタスク管理を行っています。全員がきちんと活用できているわけではありません。やはり、必要性に気付くタイミングはまちまちなのです。だからこそ、私たちは「気付くまで機会を設け続ける」べきではないでしょうか。

大塚 私たち教師は、変化や成長を



「教師として問い掛け、励ましながら生徒の成長を待つ姿勢を大事にしたい」 大塚

急ぐきらいがあります。とにかく生徒に考えさせ、自分で行動するその時を待つことが大切なのでしょう。

臼井 手帳や日誌のような機会を生かして成長する生徒もいますが、そうではない生徒もいます。だから、

1つの場で全ての生徒を変えようと思わないことが重要だと思います。この取り組みで変わる生徒が何人か出てくれば……という気持ちが大切です。「どうして手帳を書いてこないのか」と叱責し始めると、たとえ書き始めても強制になってしまします。場はつくり続けるけれど、それをどう生かすか、生徒の自立を待ちたいものです。

早川 生徒を呼び出して叱ることに手間を掛けても、生徒は自立しないでしょう。その代わり、「こういうやり方はいかがか?」「やってみるこ

とでこんな言いことがある」と教えるところには手間を掛けたいと思います。そのノウハウの共有が出来れば、教師の負担感は減り、学校全体としての主体性の育成につながるのではないのでしょうか。

大塚 自分の頭で考え、自分の判断でやってみて、自分の価値観をつくること……そうしたプロセスの中で主体性は育まれます。教師として、問い掛け、励ましながらも待つ姿勢を大事にしたいと思います。

臼井 主体性の育成は勉強と同じで、引っぱり過ぎや手の掛け過ぎはいけません。生徒を自分の思う通りに動かしているのは、生徒は結局我々を超えられません。手法を示したら、あとは励まし、自立を待つ。それが、自分たちを超える次の人材を育てるということではないのでしょうか。

私の生徒指導 ①

他者や社会とのかかわりの中で 自分のあり方を考えさせる

山梨県立甲府南高校 三枝正人

三枝正人先生は、生徒同士がかかわり合い、自分の意見を言いつつ、相手の考えを聞く活動に力を入れている。多角的な見方を示すことで、自分の生き方を考える機会になることを期待すると話す。

授業中のグループ活動で 視点の多様性に気付かせる

ものの見方はいろいろあり、多角的に物事を見て、多様性を認められる人になってほしい。私はどの場面でもそう考えて生徒と接しています。

担当する日本史の授業では、1つの史実にもいろいろな光の当て方があることを伝えます。日本の歴史は隣国抜きには語れません。中国や韓国、アメリカ、ヨーロッパなど、日本とは別の視点から歴史を見てみることを生徒に促します。1つの出来事にもその根幹を成すものがあり、同じ幹から違う枝が出ている。人々

の営みをつくり上げるスケールを感じさせ、自分の生き方に照らし合わせて考えられるように話しています。

4年前からは、授業にグループ活動を取り入れています。毎授業は出来ませんが、史料から読み取れることや人物の行動の意味するところなどを、3、4人のグループで1分半ほど話し合い、そこで出た意見をグループの代表が発表します。席が近い者同士で作ったグループなので、男女関係なく、普段は接点の少ない人と話すことにもなります。席替えがあれば、メンバーも変わります。そうして、いろいろな人と話し、視点の多様性に気付くことを期待しています。

生徒の発想に、私自身が勉強させられることもあります。その時はその場で「先生も思い付かなかった」と生徒を褒め、後で調べて分かったことを、次の授業で話すようにしています。そうしたやりとりは、生徒の自己肯定感を高め、クラスが自由に発言できる雰囲気になります。話し合いが活発になり、多様な考えがますます出るようになるのです。

共感と感謝が 他者を思いやる心を育む

担任時代は、LHRでもグループ活動をよく行いました。例えば、生徒に学習方法の悩みを紙に書かせて

集め、名前の部分を切り取った上で無作為に選んで発表し、それに対してみんながアドバイスするのです。また、「勉強で不安に感じていることをぶつけ合おう」というグループ活動もしました。どんなに優秀な生徒でも不安に思うことがあります。「すぐ眠くなる」「英単語が覚えられない」などの不安を言い合い、グループ内でアドバイスをいただきました。そのような活動を続けると、生徒の横のつながりが深まり、他者の助けを得ることに感謝の気持ちも生まれてきます。そして徐々にですが、他者の思いに考えを巡らせ、それを認めながらも、自分の意見も言えるようになっていくと感じます。

友だちの将来像を聞き 自分の未来を思い描かせる

進路指導主事として、学校全体でも他者理解を促すような活動を始めました。1・2年生の「総合的な学習の時間」では、前期に、1年生は職業、2年生は学問について各自で調べ学習をし、その結果をクラスで発表します。後期は、前期の内容を踏まえて、1年生は「私の夢〜私と仕事〜」、2年生は「私の夢〜私と進学〜」と題して自分の夢をクラスで発表します。発表後は、各発表を聞いて分かったことや気付いたことなどについてのコメントを、発表ごとに各自が書き、



山梨県立甲府南高校
三枝 正人
さいぐさ・まさと
教職歴25年。同校赴任歴14年
目。進路指導主事。日本史担当。

山梨県立甲府南高校

◎1963（昭和38）年開校／全日制、普通科・理数科、共学／1学年約280人／2013年度入試合格実績（現役のみ）は、国公立大は、東京大、山梨大、京都大などに155人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、早稲田大などに延べ311人が合格。

誰のコメントなのか名前が分からないようにして、クラス全員分のコメントを各発表者に渡します。

この活動は、生徒それぞれが発表の仕方を工夫するなど、自分の考えを発信する力を育む場となっていました。また、友だちが描く将来像や、自分の夢がどう思われるのかを知ること、自分のあり方を考え直す機会にもなります。発表は1人8分程度掛かるので、1クラス40人いれば5時間以上にもなりますが、それだけの価値があると考えています。

更に、保護者にも子どもの進路に対して多様な考え方を持つてほしいと、保護者向け講演会では、就職やその後の人生にも目を向け、中長期的な視点で進路を考える大切さを話してくれる外部の方に講演をお願いしています。

失敗を恐れず全力で取り組み 後押しをする

生徒指導でもう1つ心掛けているのは、困難から逃げず、多様な体験

が出来るように生徒を後押しすることです。ある生徒から留学の相談を受けた時、私はすぐに賛成しました。その学校では留学をあまり勧めていなかったのですが、本人は気がとがめていたのですが、教務に掛け合った結果、彼はオーストラリアに半年間留学しました。また、浪人を決めた生徒には「浪人を楽しめ」と声を掛けています。自分がどれだけ伸びていくかを実感できる1年になると考えれば、ネガティブになる必要はありません。高い目標を目の前にした時こそ、失敗を恐れずに力を尽くすことが、新たな発見を生み、次につながるかと考えて、生徒が前向きに挑戦できるように後押ししています。

そのような姿勢で生徒とかわっているためか、卒業生が度々訪ねてきてくれます。前述の留学した生徒は、今はNPOで働き、自分の力を社会に役立てたいと世界中を飛び回り、「先生が賛成してくれたから今の自分がある」と、年1回は顔を見せに来てくれます。また、センター試験の自己採点結果を持ってきて、出

願校を相談しにくる浪人生もいます。一緒に出願を検討した大学に合格してくれた時の喜びは、本当に教師冥利に尽きるものがあります。

私の担当は日本史ですが、理数科の担任を3年間持ち上がりでしたことがありました。県内屈指の進学校に入学したとうぬぼれている生徒を人格者に育て上げてほしいと、白羽の矢が立ったのです。学力に自信がある生徒ばかりでしたから、更に学力が上の他県の進学校を紹介して価値観を揺さぶるなど、さまざまな仕掛けをしました。それまで理系クラスへの担任経験がなく、生徒の視野を広げるためには何が効果的か、模索しながらの指導でしたが、結果的には多くの生徒が志望校に進学しました。生徒と共に、私も教師として成長できた3年間だったと思います。

生徒と向き合う時、私の価値観を押し付けているのではないかと思うこともあります。それでも、生徒が自らの道を考えるきっかけになればよいと考え、これからも生徒に広い世界を見せていきたいと思っています。

私の生徒指導 ②

生徒同士が意見を述べ合う場を多く設定する

私が生徒指導で最も意識しているのは、集団の力を最大限に引き出すことです。一人ひとり優秀でも、それぞれがスタンドプレーに走ったら組織としての力は発揮されません。同じ志を持つ人が集まり、同じ目標に向かって個々の力を発揮できる組織ほど、成果を上げ、個人の力も最大限に引き出せると思っています。

例えば、文化祭では生徒同士のミーティングに時間を掛けます。私のクラスでは、今年、お化け屋敷を企画しました。リーダーを立候補で

集団の中での役割を意識させて 主体性を引き出す

愛媛県立三島高校 高田潤哉

集団での力を最大限に引き出すことが個々の力を育てることにつながると考える高田潤哉先生。
日頃からの生徒との何げないコミュニケーションも重要だと話す。

選び、そのリーダーの下で、出し物の内容や演出方法、目標動員数などを生徒間で徹底的に話し合わせました。そして、本番直前までリハーサルを行って問題点を確認し、再び解決策を話し合わせました。ミーティングでのルールは、提案や意見は全てその場で出し切ることに、ミーティングでの決定事項は必ず守ることの2つです。人前での発言が苦手な生徒はアンケートに提案や意見を書き、それをリーダーが読むという方法を取り入れ、出来るだけ広く生徒から意見を吸い上げる工夫をしました。

ミーティング後に「本当はこうしたかった」などと不平不満が出ると、皆の心が1つにまとまらず、結

果的に取り組みの質が下がります。そうになると、「今日は部活動があるから」などと言って抜けていく生徒が増え、いつも同じ生徒が準備を進めるという状態になりかねません。

逆に、生徒全員参加で主体的に進めていく雰囲気がつくれると、団結力が違ってきます。単にお化け屋敷を作って来校者を楽しませたという結果だけでなく、そこに至るまでの努力も生徒の大きな財産になります。ミーティングを重ねてさまざまな意見を集約し、リハーサルをして問題点を洗い出し改善につなげる。そうした綿密な準備を通して生徒に達成感を味わわせることが、社会に出た後も集団で何かをやり遂げる力

になると考えています。

意見がぶつかった時こそ 生徒が成長するチャンス

集団で何かを行う時、往々にして生徒間で衝突が起こります。そうした時こそ、生徒の成長や集団の団結を促すチャンスだと思います。

顧問を務めるソフトテニス部では球拾いをしない生徒が時折、他の部員から非難を受けます。そうした時、私はまず部全体に対して集団で団結する意義を説き、次に問題の生徒と話をします。球拾いは誰もがすべきマナーのようなもので、それをしないのは他人任せに生きている証

拠ともいえます。それでは主体性は育めませんし、次の高みへも導けません。内心、生徒もそれが大切だと分かっているはずですから、私は根本的に大切なことを自分でしっかりと出来るようになる重要性を説きます。

指導は、生徒の弱い部分に向き合うことだと思えます。注意した時は私に反発心を抱くかもしれませんが、自分のために注意してくれたと分かれば、心を開いて話をしてくれるようになりますし、他の生徒の意見も受け入れるようになります。また、私が厳しく指導することで、周りが気を使ってその生徒を慰めることもあります。そのように、時には私が嫌われ役になることで、生徒が



愛媛県立三島高校
高田潤哉
たかた・じゅんや
教職歴12年。同校赴任歴9年
目。進路課、数学科担当。

愛媛県立三島高校
◎1923(大正12)年開校/全日制、普通科・商業科(3学年のみ情報デザイン科)、共学/1学年約270人/2013年度入試合格実績(現浪計)は、国立大は東京大、大阪大、九州大などに74人が合格。私立大は早稲田大、同志社大などに延べ172人が合格。

主体的に動き出し、結果的に部全体の結束が強くなることもあるのです。

集団の中での自分と他者の役割を理解させる

課外活動でも集団の力を育むことを意識しています。以前、数学教師を志望する生徒をリーダーにして3人1組のチームを作り、県の科学コンテストに応募しました。リーダーの生徒はその素質があると見込んで抜擢しましたが、初めは考えがたくなで、自分の思い込みで突っ走ってメンバーとよく衝突していました。やがて、メンバーは私にリーダーへの不満を言い始めました。私は「彼にも考えがあるだろう。不満があるなら直接本人に言いなさい。それ人間関係が壊れそうになるのなら、その時は私がフォローしよう」と話し合いを勧めました。チームで話し合わせると、リーダーは自分の至らないところを素直に認め、その後は「自分は数学と化学を担当するからA君は生物を」というように、個々

の強みを生かして役割分担をするようになりました。リーダーがメンバーに任せることでメンバーも主体的に活躍できるようになり、その結果、チームは大会を勝ち進み、愛媛県代表として全国大会出場を果たしました。チームのために何をすればよいのかを各人が考え、互いの役割を理解し合う、集団としての力が最大限に発揮された例だと思います。

日常のコミュニケーションが生徒指導の効果を高める

こうした生徒指導を実現するためには、私は普段から意識して生徒とコミュニケーションを取り、生徒個々の気質や強み・弱みなどを把握するようにしています。本校の生徒は控え目で自分をあまり出したがらないので、清掃活動や休み時間などを利用して、私から積極的に生徒に声を掛けるように心掛けています。普段からそうした人間関係づくりを大切にしておけば、いざという時に生徒から本音を聞き出すことがで

き、生徒指導の効果も高まります。また、生徒は社会は厳しいものと漠然とイメージしているので、自分をきちんと見てくれていた大人が必ずいると知ってもらうことも目的の一つです。自分の声を聞いてくれる人がいるという安心感が、社会へ向けて一歩を踏み出す勇気を、生徒に与えるのではないでしょうか。

各人が力を発揮できる集団づくりを意識してするようになってから、私が特に指示しなくても、「こう考えたのですが、どうでしょうか」というように、自ら考えて行動する生徒が増えているのを感じます。行事や部活動だけでなく、学習面においても、「もうそこまでやっているのか」と驚かされるほど、自分で考えて先に進んでいく生徒が少なくありません。そうした生徒は、3年生になつてからも進路実現に向けて主体的に学習に取り組むことでしよう。更には、社会に出た後も、集団の中で他者と自分を生かしながら、目標に向かって主体的に取り組める人に育つていくと期待しています。

青森県立八戸高校

綱領をよりどころに教師間で指導を 共有し、生徒に高い志を持たせる

青森県立八戸高校は県内屈指の進学校であり、生徒の多くが憧れを抱いて入学してくる。学校を誇りに感じる気持ちが高い志につながる指導によって、高校生活のあらゆる場面に主体的にかかわろうとする生徒が育っている。

学校の原則である綱領を 全ての教師・生徒が共有

2013年度に創立120周年を迎えた青森県立八戸高校は、毎年、東京大を始めとする難関国公立大の合格者を多数輩出する県内有数の進学校だ。保護者や地域からの期待は大きく、生徒は「憧れの『八高生』になった」という誇りを抱いて入学する。同校では、そうした生徒の自負心を刺激して意識を高め、人間的な成長を促すことを、生徒指導の方針としている。

入学時に配布される『八高生活のしおり』の第1章の冒頭に書かれている言葉は「Noblesse Oblige」。フランス語であり、「高貴な身分に伴う義務」という意味だ。地域社会や日本のリーダーとして将来を嘱望される生徒に強く意識してほしいこととして、この言葉の意味を入学式で説明する。更に、入学時に伝えるのが、教育活動の原則として同校に脈々と受け継がれている3つの「綱領」だ。

一、**須ク自重スヘシ**

八高に学ぶ者として、自信と誇りを持って、自らを任じ、自らを重んずること。自分の可能性を信じる

同時に、その誇りを傷つけるような品位を欠く行動や考えは自分自身に対して恥ずかしいことである。

一、**唯本分ニ向ツテ猛進セヨ**

各々の「Noblesse Oblige」に向かって敢為、堅忍の精神で当たること。本校に学ぶ者への地域の期待と愛情を感じ取ってほしい。

一、**師ヲ敬シ 友ヲ愛セヨ**

教師に生徒を愛する情熱があり、生徒に教師を敬う心があつて初めて教育効果がある。高い理想に向かって友人同士が助け合いながら猛進する時、教師と生徒の間に師弟同行の精神が育つ。

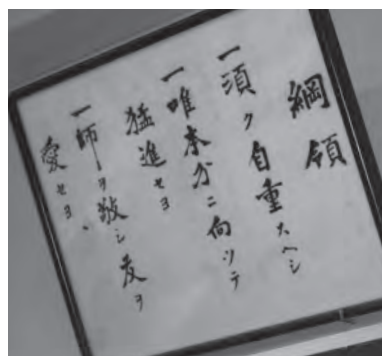


写真 全ての教室の黒板の上には、綱領が掲示されている。生徒には、日常的に言動を綱領に照らし合わせて考えるように促している

綱領は、学習指導や生徒指導の原点であるとし、入学時に生徒や保護者にもその意図や内容を詳しく説明し、教室の黒板の上に掲示している（写真）。日々の指導でも、教師は事あるごとに綱領を口にするため、い



青森県立八戸高校
中村まり子 なかむら・まりこ
 教職歴30年。同校赴任歴9年目。進路指導主事。「仕事をやる女性としての見本でありたい」



青森県立八戸高校
嶋雅樹 しま・まさき
 教職歴29年。同校赴任歴7年目。1学年主任。「生徒とのつながりや信頼感を大切にして絆を深める」



青森県立八戸高校
種市朋哉 たねいち・ともちか
 教職歴26年。同校赴任歴7年目。2学年主任。「自信と勇氣、正義感を持ち、社会貢献できる人を育てたい」



青森県立八戸高校
清川和幸 きよかわ・かずゆき
 教職歴27年。同校赴任歴4年目。3学年主任。「夢を持ち続け、気配りが出来る生徒を育てたい」

青森県立八戸高校

- ◎1893（明治26）年、青森県尋常中学校八戸分校として開校。自由と自主性を掲げ、部活動や生徒会活動も活発。「文武両道」を実践する生徒の育成を目指している。
- ◎形態／全日制、普通科、共学
- ◎生徒数／1学年約280人
- ◎13年度入試合格実績（現浪計）／国公立大は、東北大、東京大、京都大などに167人が合格。私立大は、慶應義塾大、中央大、明治大、早稲田大などに延べ269人が合格
- ◎住所／青森県八戸市長者4-4-1
- ◎電話／0178-14410916
- ◎URL／<http://www.sanpachi-n.asn.ed.jp/~h/>

つの間にか暗誦できるほど、生徒に浸透していく。2学年主任の種市朋哉先生はこう語る。

「私は1つめの綱領が最も大事だと捉えています。自分を大切にすることは、他者の存在を大切にすることにつながると思うからです」

綱領は、教師にとって教育活動の方針を共有する原点となる。3学年主任の清川和幸先生はこう話す。

「学年経営方針には綱領の意図が反映され、綱領を踏まえて具体的な教育活動を検討します。指導に迷いが生じた時は、綱領に立ち返って考えるようにしています。ですから、教師によって指導に大きなずれが生じるようなことはありません」

掃除、挨拶、時間厳守の意味を深く理解させる

同校の生徒指導における重点指導事項は「掃除」「挨拶」「5分前」だ。これらは学校活動をスムーズに進めるルールであると同時に、生徒の人間性を高める指導でもある。生徒に

は、次のような説明をする。

◎**掃除** 古来、東洋で行われてきた人間修養の手段であり、身の回りを清潔に保つことが、公共物を大切にしている、自分の学校に誇りを持つことにつながる。自分が使用しない場所も掃除することによって、相手思いやる心が育つ。

◎**挨拶** 校内の雰囲気をやかにして、学習環境を整えるものであり、将来、国際社会を生きるためのパスポートとなる。

◎**5分前** 時間を守ることは社会の最低限のルールであり、組織のモラルの維持にもつながる。遅刻厳禁はもちろん、授業などでは所定時間の5分前には移動を終え、気持ちを整えて待機することが大切である。

項目の意味を理解した生徒は、単にルールを守るだけでなく、自分の行動に責任を持ち、より良くするための方法を考えるようになるという。例えば、ある掃除の班がゴミの分別に時間が掛かり、焼却炉に入れる時間に間に合わないことがあった。生徒は「どうしたら分別を早く

終えられるか」を話し合い、役割分担を決めて効率化を図ることで、その問題を解決した。

ただ、「5分前」は徹底が難しいと1学年主任の嶋雅樹先生はいう。

「掃除と挨拶は、1年生から一生懸命に取り組む姿が見られますが、5分前はなかなか守れない生徒がいます。守れない生徒を見かけた時には、全教師のルールとして、担任だけではなく、気付いた教師がその場で指導します。『時間を守ることは、相手の存在を尊重することだ』と、時間厳守の根本的な意味を根気よく説明していくと、生徒の行動は次第に変化していきます」

一方、教師が授業開始時間に遅れた時などは、生徒に謝罪する。生徒にルールの大切さを指導する以上、教師はその手本として、襟を正すことも大切に行っている。

高い志があれば 自ずと規範意識が育つ

髪形や服装などの日常生活にかか

わる生徒指導は、個別に行うことはあるが、全体的な指導はしていない。生徒は、入学当初から学習や生活の基本姿勢が身に付いており、指導があまり必要ないこともあるが、それ以上に、高い志を持たせる指導によって生徒の規範意識が自然に高まっていく面が大きいという。

生徒の肉体的な成長を促し、志を高める機会として重視するのは2者面談だ。どの学年も年5回ほど行い、学習指導と合わせて生徒指導の場としている。種市先生はこう語る。

「どの生徒も『もつと成長したい』と期待を抱いて入学しますが、授業が難しくなり、交友関係が広がる中で、周囲に流されたり、自分を見失ったり、混乱したりすることがあります。教師は生徒と一対一でじっくり向き合い、生徒が自分で答えを見付けるのを待ちながら、話を聞くことに徹しています」

1年生の面談では、生徒に夢を語らせながら、学ぶ意味を問い、将来のイメージを膨らませることに重点を置く。例えば、将来就きたい仕事を尋ねた時、「人の役に立つ仕事がいい」と答える生徒が少なくない。

具体的にどのような役に立ちたいのかを聞くと、「人の役に立つとは、人の命を救うこと。だから医師を目指す」と限定的なイメージを語る生徒が目立つという。

ここで、教師は「人の役に立つことは命を救うことだけか」と問い掛ける。そうしたやりとりを続けるうちに生徒の視野が広がっていき、やがて「全ての仕事は人の役に立つもの」だと気付くという。そうして改めて、自分が何に関心があり、どのように人の役に立てるのかを、生徒に問い掛ける。

「生徒が自分の生き方を真剣に考えて出した答えが土台となって、志が育つのだと思います」（嶋先生）

生徒主導の学校行事でリーダーシップを実践

高い志を持たせる指導としてリーダーシップの育成にも力を入れる。

「本校には、中学校でリーダー的な存在だった生徒が多くいます。将来的にも、人を引っ張ったり、まとめたりする役割を担いたいという思いを持っています。全ての生徒に

リーダーとしての心構えを身に付けてほしいと考え、1年生からリーダーシップの大切さを説くなどして意識を高めています」（清川先生）

集会では、人をまとめるためには、周囲への気配りや相手を思いやる思慮深さが不可欠といった心構えなどを繰り返し説く。また、面談では生徒の課題を踏まえ、その時々々にチャレンジすべきことを確認する。

生徒が実際にリーダーシップを発揮する機会が、さまざまな学校行事だ。中でも、7日間かけて、文化祭、体育祭、球技大会、後夜祭を実施する「八高祭」は、生徒主導で企画・運営を進める。教師はほとんどかわらず、3年生のリーダーシップが試される場となっている。

八高祭では、全校が縦割りの4グループに分かれ、3年生を中心とした執行部の生徒が各グループを引っ張っていく。3年生は、1・2年生に対して「この期間は燃えるぞ」と気持ちを高めると共に、役割分担を決めて指示をするなどしてイベントをつくり上げていく。進路指導主事の中村まり子先生は、その時の生徒の様子を次のように話す。

「本校に赴任した時、八高祭の運営は生徒が全て行うと聞き、驚きました。大きなイベントですが、教師がすることはほとんどありません。生徒はたくさん問題にぶち当たりますが、『教師の手は借りない』と強く意識しており、自分たちで解決します。なぜ、本校の生徒にはそれが出来るのかを考えると、『自分たちだけで絶対にやり遂げる』と生徒たちが本気で取り組み、更に、教師が生徒を信頼して全てを任せているからだと思います」

受験勉強で支え合い人間関係の大切さに気付く

生徒には、社会貢献の意識を持つ大切さも、「Notesse Ojige」という言葉と共に伝えている。その土台となるのが、周囲の人々を思いやる中で築く深い人間関係だ。ただ、ここ数年、社会の風潮の変化などを背景に、人間関係づくりに悩む生徒が増えてきているという。

そうした中でも、生徒が深い人間関係を築き、その良さを実感する機会となっているのが受験勉強だ。多

くの生徒が、放課後や土日も学校で勉強をするため、「一緒に頑張っている」という雰囲気生まれやすい。教師は「受験は団体戦」と伝え、生徒同士の連携を促している。例えば、質問に来た生徒には、「その内容は、Aさんが得意だから聞いてみるというよ」と言っておいて、教師はあえてその場では教えず、生徒の名前を出して、学び合いにつなげることもある。

「目標とする大学は違っても、支えたり、支えられたりする関係の中で深い絆が生まれます。後輩に向けて合格体験を話す時にも、他の生徒の存在が支えになったと話すと生徒は大勢います」（嶋先生）

生徒間に強い仲間意識が育つているため、推薦入試などで先に合格を決めた生徒が、他の生徒を気遣い、フォローする姿も見られるという。

「入試本番は自分1人での戦いとなりますが、そこに至るまでは家族や友だち、教師など、多くの人の支えがあります。改めて考えると、受験は社会に出てからも求められる他者意識を養う上で、非常に貴重な経

験になるのだと思います」（清川先生）

密な情報交換により 全学年の教師が指導を共有

これらの生徒指導は、どのように教師間で共有されているのか。

1つには、綱領や重点指導事項の存在によって、教育活動の原則や最低限のルールの共有が徹底されていることが大きい。「こういう生徒を育てたい」というビジョンが明確なため、自ずと指導内容が収斂されていくわけだ。

日常的に教師間の連絡が密なことも強みだ。学年間では、学年主任同士がこまめに情報共有をして、目線を合わせている。

「学年によってカラーは多少違いますし、指導方法の細かい部分は異なりますが、情報共有によってお互いの良い指導を取り入れ合っています」（清川先生）

職員室は学年別のため、学年団では日常的にコミュニケーションを取っている。そのため、学年団で生

徒を育てるという意識が強く、教師は学年のほとんどの生徒の名前を覚えていて、生徒と教師が互いに知っているため、気付いたことがあれば、その場ですぐに指導している。

「学年の指導と学校全体の指導がほぼイコールのため、いずれかの学年に所属すれば、学校全体の方針を把握できます。他校から異動してきた教師も指導方針を共有しやすく、一貫した指導が可能になっていま

す」（嶋先生）

日々の生活や学習、進路、行事などについて深く考え、本気で取り組むことは、本来、「自分」のために他ならない。そこに「やらされている」という感覚があれば、成長のきっかけにはなり得ないだろう。同校は、そのことに気付かせることからスタートし、主体性を育む指導により、生徒が卒業後も人間的に大きく成長するための土台を築いている。

卒業生の声



くすみほこ
久住美法子さん
東京大教養学部
文科三類1年

人とのつながりが成長を促してくれた

高校時代、行動の指針となっていたのが綱領でした。中でも「須く自重スヘシ」が好きで、今でも意味を考え続けています。以前は「謙虚にしろ」という意味かと思っていましたが、大学で新たな出会いを重ねる中で、相手の気持ちを考えて行動することの大切さを述べているのかなと考えるようになりました。綱領は、時代を超えた普遍的教えだと思っています。これからも自分の行動を綱領に照らし合わせて見つめ続けたいと思います。

高校生活は、周囲の人たちに支えられて過ごしてきましたが、特にそれを感じたのが受験期でした。先生方は「受験は団体戦」と度々話されていましたが、正直なところ、私は個人戦だと思っていました。しかし、受験本番が近付き、苦しくなるにつれ、友だちと勉強を教え合ったり、友だちが合格祈願のお守りを作ってくれたり、友だちの存在が大きくなりました。更に、授業で教わったことがない先生方からも「頑張っているか」と声を掛けていただくようになり、周りの人たちに支えられている自分がいました。試験場で机に座ると、友だちや先生方の顔が自然と浮かび、「今、みんなも他の場所で頑張っているんだ」と思うと勇気が湧いて、全く緊張せずに試験に臨めました。帰りの新幹線の中で、「これが団体戦ということか」としみじみと感じたことを思い出します。

八戸高校での3年間は、学習だけではなく、友人関係や学校行事など、さまざまなことが本当に充実していた日々でした。尊敬できる先生方や共に頑張る友だちなど、大勢の人とのつながりがあったからこそ、今の自分があるのだと強く感じています。大学や社会に出てからも、自分と相手が高め合えるような関係を築いていきたいと思っています。

国語、地歴・公民

充実が求められている 言語活動を授業に どう取り入れるか

新課程では、生徒の思考力、判断力、表現力などを育む観点から、基礎的な知識・技能の活用を図る活動と共に、言語活動の充実が求められている。しかし、時間的制約がある中で、受験指導とのバランスを図りながら、どのように行えばよいのかという課題があるのが現状だ。今号では、国語、地歴・公民において言語活動をどのように取り入れているのか、2校に現状と今後の方針を聞いた。

Q. 国語、地歴・公民における新課程指導上の課題は何ですか

国語

- 国語における言語の指導とは別に、学校全体で取り組む言語活動の中核教科として、国語がどうかかわっていけばよいのか。(埼玉県)
- 言語活動の要として国語に対する期待は大きいものの、限られた単位数や各学校の制約の中で実践するのはかなりの工夫が必要。それこそが教師の醍醐味だと思うものの、漠然とし過ぎている上、他教

科でも言語活動を行おうとすると、どう調整するのが新たな課題になると感じている。(三重県)

地歴・公民

- アクティブ・ラーニングを授業に取り入れてみたいが、先行事例が少なく、まだ踏み込めていない。特に、「日本史B」で知識伝達と内容進化の両立をいかに図るかが大きな課題。(静岡県)

- 言語活動をどのように充実させていくか、そして、それに伴い、どのように評価を変えていくかが課題である。(和歌山県)
- 歴史を考える視点や解釈する力を付けるために必要な歴史事項の説明などの論述指導を、通常の指導に加えてどこまで取り組むかが、現在の課題である。(兵庫県)
- 地歴・公民で言語活動を行うとなると、受験指導とのバランスが難しい。(静岡県)

出典/『VIEW21』高校版読者モニターへのアンケート結果より。アンケートは2013年6月にウェブとファクスで実施。有効回答数は64

国語 学校事例

神戸大学附属中等教育学校

読む、書く、話す、聞くなど

言語活動を総合的に取り入れ
表現力や思考力を鍛える

言語活動の充実に
学校全体で取り組む

神戸大学附属中等教育学校は、神戸大学発達科学部附属中学校を再編して2009年に開校した。13年度現在、1期生は高校に当たる後期課程（4～6年生）の5年生（高校2年生）という新しい学校だ。

同校では、「国際的視野を持ち未来を切り拓くグローバルキャリア人の育成」を教育目標に掲げて、「見つける力」「調べる力」「まとめる力」「発表する力」の4つの力の育成を、全教科の研究主題として授業改善に取り組んでいる。

目標実現のための土台となるの

が、同校が発達科学部附属中学校時代から40年以上にわたって力を入れてきた言語活動だ。同校では、中学校に当たる前期課程を中心に、テーマ学習として聞き方・話し方の訓練の時間を設けている他、全教科で言語活動を行っている。

例えば、50年近く続く「小集団学習」は、4人1組のグループで行う学び合い活動だ。司会、発表、計時などの役割をそれぞれ分担し、必ず生徒全員が活動に参加するのが特徴。また、「リーダー学習」は、生徒がローテーションでリーダーを務め、毎時間の授業の冒頭5分間で、教師に代わって、前の時間に行った授業の復習や、その日に学習する内

容を紹介したり、問題演習の指導を行ったりする。

進路指導部長の高木優^{よし}先生は、そうした言語活動について次のように説明する。

「国語科が牽引役となって、他教科の学びに必要な表現力や言語力の基礎を培うのが通常の言語活動のイメージだと思いますが、本校では、前期課程で学んだ言語技術が全ての授業の土台となっているのが特徴です」

前期課程から発表や話し合い活動を経験しているため、生徒は後期課程においても授業で活発に発言し、長い文章もいとわずに書く。東京大の入試問題のような思考力を要する難しい課題にも意欲的に取り組むという。

各教科では、そうした生徒の特徴や気質を生かして、効果的に言語活動を組み入れている。地歴・公民担当の水嶋正稔^{まさとし}先生は、「講義一辺倒の授業ではなく、生徒が考えたり話し合ったりする時間を多く取っている」と語る。図表をふんだんに用いた独自のワークシートを活用し、随時、小集団学習を取り入れながら、



神戸大学附属中等教育学校
高木 優
たかぎ・よし
進路指導部長。地歴・公民担当。



神戸大学附属中等教育学校
岸本知之
きしもと・ともゆき
第4学年主任。国語担当。



神戸大学附属中等教育学校
水嶋正稔
みずしま・まさとし
第5学年主任。地歴・公民担当。



神戸大学附属中等教育学校
中垣篤志
なかがき・あつし
理科主任。化学・生物担当。



神戸大学附属中等教育学校
平松はるみ
ひらまつ・はるみ
第5学年担任。国語担当。

神戸大学附属中等教育学校

◎2009年度、神戸大学発達科学部の旧附属明石中学校・住吉中学校を母体として、中等教育学校として発足。12年度、後期課程（高校）が開設された。小集団学習や総合学習「Kobeプロジェクト」など、言語活動を重視した特徴的な教育を展開する。

- ◎全日制／普通科／共学
- ◎1学年約145人
- ◎2013年度入試合格実績／なし（1期生の卒業は2015年3月）

個人が考える時間、考えたことをグループやクラス全体で共有する時間などを設けている。

理科では、実験後に必ずグループで結果を考察する時間を設けたり、みんなで問題を解き合う時間を設けたりしている。理科主任の中垣篤志先生は、「前期課程で表現力や言語力を鍛えている分、生徒は意欲的に取り組んでくれます。後期課程では生徒の意欲を維持・向上させつつ、入試にも必要な高度な内容に発展させていくことを意識しています」と語る。

「総合単元学習」で幅広い表現力の育成を目指す

国語では、全ての学年で、同校独自の言語活動「総合単元学習」を取り入れている。1970年代から続く伝統的な取り組みで、毎年2つの学年で実施する（13年度は3学年と4学年が行う予定）。教師が独自に単元をつくり、教科書はもちろん、書籍や資料など教科書以外の教材も駆使しながら、「読む・書く・話す・聞く・見る・調べる・考える」力を総合的に育成する取り組みである。

「総合単元学習」に充てられる授業時間数は、担当教師によって異なる。発表前の数時間を利用して集中的に行う場合もあれば、十数時間をかけて行う場合もある。現5学年担任の平松はるみ先生は、12年度4学年の2～3学期で「学校づくりプレゼンテーション」をテーマとする「総合単元学習」を実施した。

授業での学びが実生活を変えることを実感

平松先生が実施した「総合単元学習」の流れは、次の通りだ。

- ① 4学年の生徒全員に、同校の学習や施設、行事、部活動、コミュニケーション、知名度など、学校の現状と課題に関するアンケートを実施。
- ② 元記者を招いた講演会を行い、インタビューの方法を学んだ上で、同校の教職員にインタビューをし、先のアンケートと併せて、生徒・教職員が感じている学校の課題を把握。
- ③ 自分が抱える問題にアプローチする

図1 「総合単元学習」の評価基準

時	主題	お ね が い	評価の観点
		・4月～12月までのふり返り 1. 学校の現状についての意識調査 2. 自分が解決したい問題についての意識調査 3. 自分が考える問題解決案についての調査 4. 学校のよさについての意識調査 5. 問題や解決法に関する学習材調査	Ⅰ Ⅱ
1次 1時	課題発見	・学校の現状についての意識調査を見直し、問題を列挙できる。 ・問題について話し合い、分類することができる。 ・自分が抱えたい問題を発見することができる。	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ
冬休み 課題	冬休み課題 調査	・自分が担当する問題に関する本を調べることができる。 ・本を読み、読書記録を書き、提出することができる。	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ
2次 1～3時	読書 「隠れたカリキュラム」	・読書を読み、言語についての知識を高め、内容を理解することができる。 ・自分が担当する問題に関連づけることができる。 ・マインドマップの書き方を知り、語の関連を意識することができる。	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ
3次 1・2時	講演を聴く	・講演を聴いて、インタビューの仕方を理解することができる。 ・副校長にインタビューし、マインドマップで記録することができる。	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ
休み 時間	職員にインタビューする	・グループ内で各自がどの職員にインタビューするかを話し合うことができる。 ・インタビュー内容を考え、職員が持つ問題を話し取り、マインドマップで記録することができる。	Ⅰ Ⅱ Ⅲ
3時	話し合い	・生徒の問題と教職員の問題を整理し、分類することができる。 ・問題解決に向けて、各自が読んで本の内容を説明することができる。 ・問題解決に向けて話し合うことができる。 ・情報を共有し、新しい提案を考えることができる。	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ
4次 1～4時	プレゼン準備	・プレゼンの方法を知る。 ・グループでプレゼンの方法を選択し、構成し、分組することができる。 ・分組した内容をまとめることができる。	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ
5・6時	プレゼン発表 (干渉)	・グループでプレゼンテーションを行うことができる。 ・質疑応答ができる。	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ
7時	プレゼン発表 (本戦)	・発表点を把握することができる。 ・グループでプレゼンテーションを行うことができる。 ・質疑応答ができる。 ・評価することができる。 ・ふり返りを行う。	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ
	事後評価	1. 現状から課題を発見し、意識できたか。 2. 課題解決に向け、必要な本や情報を収集し活用できたか。 3. 話し合いに積極的に参加し、発表の準備ができたか。 4. 話し合いや発表内容、文章や図表を用いてまとめることができたか。 5. 学習内容を関連させ、統合することができたか。	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ

*学校資料をそのまま掲載

- ④ 同単元のメインテキストである荻谷剛彦(たけひこ)オックスフォード大教授の評論「隠れたカリキュラム」を読解。男女の区別や年齢による区別など、当たり前と思われていることに疑問を持つ必要性を学び、読解力と批判的思考力を養う。
 - ⑤ グループごとに、学校の課題の設定と解決法をまとめてプレゼンテーションを行う。
- この一連の過程に、「読む・書く・話す・聞く」の各技能の他、質問する力やデータ分析力、情報収集力など、言語・表現力に必要なあらゆる技能・能力が盛り込まれている。「12年度の4学年は中等教育学校の1期生なので、自分たちで学校をつくっていききたいという思いが強くなります。『総合単元学習』で提案した行事の改革案を、今年度の文化祭での改善に結び付けた生徒もいます。授業で学んだことが自分たちの

生活を変えていくという実感が持てるのも『総合単元学習』の魅力です」と、平松先生は話す。

取り組みの評価は、「関心・意欲・態度」「書くこと」「読むこと」など5つの観点について、それぞれの取り組みに応じて評価基準を明確にしている他(図1)、最後に評価シートを書かせて自己評価・他者評価による「ふり返り」を行う。

古文や漢文でも 作品解釈の話し合いを行う

古文や漢文においても、言語活動を授業に取り入れている。講義形式になりがちな文法や句法などの知識事項の解説は作品の読解と共に、学んだ文法や句法などについては、覚えているかどうかを口頭で確認する活動を行う。同時代の別の作品との比較などを生徒同士で話し合わせながら行うことで、作品解釈の幅を広げる活動もあるという。

「総合単元学習」を始めとする言語活動は、大学入試に必要な力の育成という観点でも有益であると平松先生は強調する。

「読み、書きの指導をする際、入

試にも通用する力になっていくかどうかを教師が意識しさえすれば、一般入試に対応できる力は十分に身に付くと思います。発表やプレゼンテーションの時間は数時間ですが、それでもAO入試や推薦入試の面接につながる可能性を考えれば、大きなプラスになるでしょう」

今後の課題は、生徒の学力幅への対応である。13年度に県立高校から赴任した国語科の岸本知之先生は次のように述べる。

「本校の生徒は、授業を受ける姿勢やプレゼンテーション能力、考える力など、学習意欲や学習能力は平均的な高校生より高い反面、帰国子女が多いということもあり、漢字などの基礎知識や文章力が身に付いていない生徒も少なくありません。現在、大学入試を見据えて、漢字や語彙のドリル学習などを行い、基礎学力の向上に着手しているところですが。前期課程で養った生徒の意欲や好奇心を維持・向上させつつ、入試学力の土台をいかに築いていくのを考えてながら、今後も授業改善を重ねていきたいと思っています」

地歴・公民 学校事例

長崎県立佐世保北高校

アクティブ・ラーニングで

学習内容を効果的に定着させ、

主体的な学びの意欲を引き出す

アクティブ・ラーニングの 導入を地歴科全体で進める

長崎県立佐世保北高校の地理歴史科では、言語活動の充実を図るため、「アクティブ・ラーニング」の導入を進めている。アクティブ・ラーニングは、教師による一方向的な講義形式の授業ではなく、グループワークやディスカッションなど生徒の能動的な学習への参加を取り入れた授業法のこと。新課程への対応をテーマにした10年経験者研修参加をきっかけに、世界史担当の朝長千恵先生が6月の研究授業で初めて行った。

「資料の読解などにかかわる主題を設定して、言語活動の充実を図る

ことが6月の研究授業のテーマでした。具体的には、『アメリカ横断鉄道の敷設を新聞記者の目線でレポートする』という設定で、鉄道敷設に関する2つの資料写真を見せた上で、当時の社会状況、人々の考えを読み取る活動を行いました(朝長先生)

横断鉄道開業を喜ぶ白人たちのみを写した写真と、敷設作業に従事する中国人労働者を写した写真を見て、それぞれの写真が、どのような新聞購読層に向けて、何を伝えようとしたのかなどを議論させたところ、教師の予想以上に生徒たちは議論に熱中したと、教科主任で日本史担当の溝上貴稔先生は話す。



朝長先生の世界史の授業でのグループワークの様子

「新課程を迎えての朝長先生のアクティブ・ラーニングの授業は、地理歴史科全体の指導改革の起爆剤になったと思います。今は、ICTの利用も含めた言語活動の充実を図るため、アクティブ・ラーニングの研究授業を定期的に行いながら新しい指導法を模索している段階です」

言語活動は、他者と協同して課題を解決する力を育む

6月の研究授業を踏まえて、朝長先生は2学期から、2年生の世界史の授業をアクティブ・ラーニング中

心の授業形態へと切り替えた。授業の大まかな流れは、最初の20分間で板書と説明を行い、残りの30分間は生徒がグループになってプリントの問題を解いていくというものだ。

「今までの授業では、分からないところがあっても定期考査の前に復習すればよいと考える生徒もいたと思います。しかし、グループワーク中心の授業では、授業時間内に友だちと解決しなければなりません。つまり、目指しているのは、主体的な学びが必要な授業の仕組みであり、それによって深い理解や定着が図れると期待しています」(朝長先生)

生徒には、グループワーク中の立ち歩きも認められている。グループ内で話し合っても分からないことは、他のグループに聞いて解決するためだが、最初のうちは、生徒たちはなかなか動こうとしなかったという。

「自分1人で考えることに慣れていない生徒に、他の人に聞いてでも問題を解決しようという意識を醸成することも、この授業の目的の1つです。社会では、周囲とコミュニケーションを取りながら、問題を解決す

る力が必要です。他者と協同する力を身に付けられるのがアクティブ・ラーニングであり、言語活動なのだと思います。今まで動かなかった生徒がずっと立ち上がり、他のグループに足を運ぶ瞬間は感動的です」(朝長先生)

アクティブ・ラーニング中心の授業に変えてから、世界史に対して自信を失っていた生徒が、グループの中で答えを導き出そうと生き生きとした様子を見せるなど、朝長先生は手応えを語る。また、東京大など、入試で高度な論述力が求められる難関大を志望する生徒は、より発展的な内容を議論するなど、生徒たちは自分のレベルに合った活動を同じ時間内で展開している。

授業で使用するプリント(図2)は、朝長先生が作成したもので、ワークシート、確認問題、演習問題の3つで構成されている。確認問題は、授業を振り返ったり、教科書や資料集を見たりすれば答えを導けるものだ。授業中に確認問題に取り組むことで学んだ内容が定着し、「家で復習しなくても分かる」という声が生徒から聞かれるようになった。



長崎県立佐世保北高校
舟越 裕
ふなこし・ひろし
進路指導主事。日本史担当。



長崎県立佐世保北高校
溝上 貴稔
みぞがみ・たかとし
教科主任。日本史担当。



長崎県立佐世保北高校
朝長 千恵
ともなが・ちえ
世界史担当。

長崎県立佐世保北高校

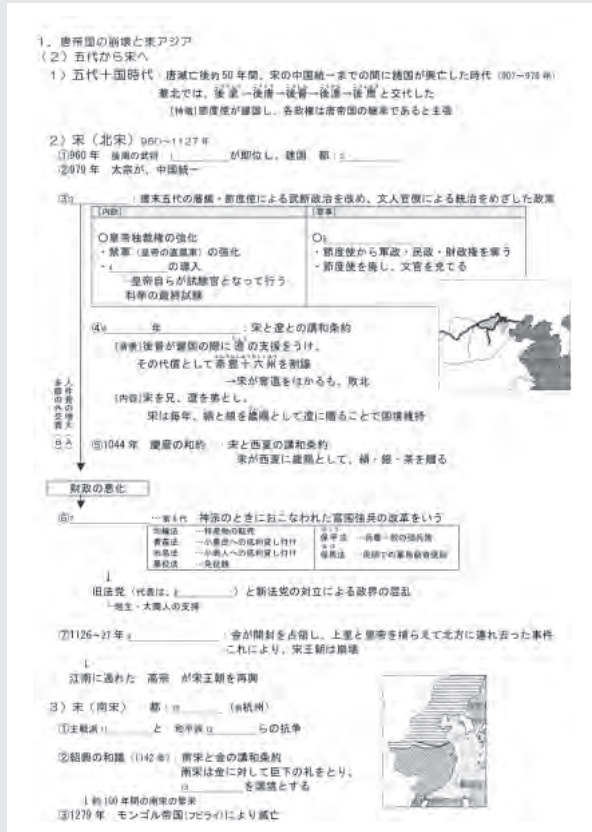
◎2003年度から全学年で早期補習を廃止し、毎日50分授業の7校時制を採用。「分かる授業の展開」に注力する。04年度から併設型中高一貫校となる。

◎全日制/普通科/共学
◎全校生徒数701人
◎2013年度入試合格実績(現役のみ) / 国公立大は、東京大、京都大、大阪大、九州大、佐賀大、長崎大、鹿児島大などに151人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、立命館大、福岡大などに延べ141人が合格

高い授業力が求められるアクティブ・ラーニング

だが、アクティブ・ラーニング中心の授業への移行は、まだまだ試行錯誤の途にある。今は、生徒の様

図2 朝長先生のプリント



プリントは、ワークシート、確認問題、演習問題の3つで構成されている(図はワークシート)。朝長先生がワークシートを使って講義を行った後、生徒はグループワークによる問題演習に取り組む。演習問題の最後には、授業を振り返るアンケートを行い、言語活動を含めた自己評価をする *学校資料をそのまま掲載

子を見て授業の流れも都度変えており、演習問題の解説を次の授業に回すこともあるという。何をどこまで、どうやって学ぶのか、授業を新しく設計している段階だ。

「アクティブ・ラーニングを行うためには、私の講義を20分間に凝縮しなければなりません。そのため、講義による説明を行うべきことと、プリントなどでの説明で理解できることを適切に選択することが重要です。その上で、講義による説明を行わないことはもろさずワークシート

に盛り込んだり、講義で説明したことが理解できていれば解ける問題を確認問題で出題したりと、講義、ワークシート、確認問題、そして演習問題が一貫性を持っているかという点に注意しながら、講義やプリントの内容を決めていきます。正直、従来のチョーク&トーク型の授業に比べると、準備は非常に大変ですが、教育効果も高いと感じていますし、自分自身の授業力の向上にもつながっていると思います」(朝長先生)

言語活動を拡充した授業への転換

は簡単ではないと、進路指導主事では日本史担当の舟越裕先生も率直に語る。

「朝長先生のようなアクティブ・ラーニング中心の授業を自分も行いたいと思いますが、さまざまな校務を行いながら、そこまでの準備の時間を捻出するのは難しいのが現状です。ただ、今まで通りの教え方では駄目だということも分かっています。社会的な事象に対しての興味・関心が低い最近の生徒に、『考えさせる場』を教師が意図的につくり、

気付くことの面白さを伝える必要性が増していると感じます」(舟越先生)

「チョーク&トークでずっと授業をしてきたので、最初はアクティブ・ラーニングに興味はありませんでした」と明かす舟越先生も、朝長先生の授業成果を踏まえて、今、授業研究に取り組んでいる。

50分の授業を超えたトータルな学びのデザインが今、教師の共同作業によって進められている。

「友だちと一緒に考えるよりも、先生の歴史の解釈などを聞きたいという生徒もいます。教師の教養を雑談の中に交えながら、歴史の流れを豊かに示すことも授業の醍醐味であることは事実です。そうした深い知的喜びを求める生徒の要望にどう応えていくかも課題です」(朝長先生)

「今後も研究授業を積み重ねて、地理歴史科全体で指導技術を向上させたいですね。研究授業には他教科の先生も参加し、さまざまなアドバイスをいただいています。また、アクティブ・ラーニングで興味を喚起された生徒が更に主体的に探究できるように、授業外の時間も含めて学びをサポートしていきたいと思っています」(溝上先生)

23 | VIEW2 | December 2013



大阪府立
つきの木
檜の木高校

統一した指導の実現

分掌中心の「4室体制」で 学習指導と生活指導を 両輪とした指導を実現

◎2003年に大阪府立島上高校と大阪府立高槻南高校の統合整備により開校。教育方針は「学習活動の重視」「規範意識の確立」「自主自立の精神の育成」「国際理解教育の推進」。国際交流にも力を入れ、オーストラリア、タイ、韓国の高校と姉妹校提携を結ぶ。

設立	2003(平成15)年
形態	全日制／普通科単位制／共学
生徒数	1学年約240人
13年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、金沢大、名古屋工業大、滋賀大、奈良女子大、大阪大、大阪教育大、神戸大、広島大、首都大学東京、滋賀県立大、大阪府立大などに30人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西大、近畿大、関西学院大、甲南大などに延べ466人が合格。
住所	〒569-0075 大阪府高槻市城内町2-13
電話	072-675-2600
Web Site	http://www.osaka-c.ed.jp/tsukinoki/

変革のステップ

<p>背景</p> <p>◎府立2校の統合整備により開校。単位制など母体校との制度の違いの調整が課題に</p> <p>STEP 1</p>	<p>実践</p> <p>◎生活指導の徹底と共に、分掌を中心とした独自の組織の構築により、学校全体で学習・生活指導の足並みをそろえる</p> <p>STEP 2</p>	<p>成果</p> <p>◎生活指導面で地域から高い評価を得る。学習指導の充実により、進学実績、入試倍率共に好調を維持。教師の意識統一が進む</p> <p>STEP 3</p>
--	---	---

母体校との制度や活動の調整の中で
学校づくりがスタート

「おはようございます」
 整然と走る自転車が次々と校門に吸い込まれ、さわやかに制服を着こなした生徒たちが、立ち番指導の教師と挨拶を交わしながら校舎へ入っていく(写真1)。大阪府立檜の木高校のいつもの登校風景だ。8時5分を境に人影はなくなり、やがて昇降口前は教師だけとなる。こうした生徒の様子は、地域から高い評価を受け、他県から視察に訪れる教育関係者も多い。
 同校は、2003年に府立2校の統合整備により開校した普通科単位制高校だ。生徒は規律正しく、落ち着いた雰囲気だが、統合後の2年間は、母体となった学校と檜の木高校の生徒が同じ校地を共有していたため、母体校と新校とで教育活動を調整して行わなければならず、慌ただしい日々が続いた。更に、「単位制」について、地元中学校へ手分けをして説明して回ることもしばしばあった。開校時に赴任した生活指導室長の奥谷彰男先生はこう振り返る。
 「単位制の学校は、大学のように自由な雰囲気が好きで科目だけを勉強するというイメージが広まっていました。私服で一足制の母体校の生徒と、制服で二足制の新校の生徒が同居する中で、新校としての方針、文化を確立し、正しい姿を伝えることが必要でした」



大阪府立槻の木高校校長
平野裕一 ひらの・ゆういち
 教職歴29年。同校に赴任して1年目。「生徒の成長を第一に、緻密かつ大胆であり続けること」



大阪府立槻の木高校教頭
浅田和也 あさだ・かずや
 教職歴27年。同校に赴任して11年目。「しなやかなで、したたかに動く！」



大阪府立槻の木高校
山本尚 やまもと・ひさし
 教職歴31年。同校に赴任して9年目。首席・学校運営室長。「分かれ道では迷わない」



大阪府立槻の木高校
奥谷彰男 おくたに・あきお
 教職歴31年。同校に赴任して11年目。首席・生活指導室長。「常に明るく爽快と！」



大阪府立槻の木高校
片岡弘典 かたおか・ひろふみ
 教職歴29年。同校に赴任して5年目。学習指導室長。「志は高く、目の前のことは誠実に」



大阪府立槻の木高校
若林伸治 わかばやし・しんじ
 教職歴35年。同校に赴任して6年目。学年室長。「感動することをやめた人は生きていないのと同じことである」



大阪府立槻の木高校
吉岡隆輔 よしおか・りゅうすけ
 教職歴5年。同校に赴任して3年目。学校運営室。「人によさしく、自分に厳しく」

校門で遅刻をチェックし チャイム前着席も徹底

まず、学校づくりの主軸に据えたのは生活指導だ。遅刻のチェックは教科担任が教室で行っていたため、生徒は始業ギリギリに教室になだれ込み、授業はざわついた雰囲気の中で始まっていた。そうした状況の改善に着手したのだ。

「学習指導の充実のためには、生活指導が基盤になると考えました。私が生活指導室長になった開校3年目に、毎朝、教師が正門に立ち、8時5分以降は全て遅刻にする方針を打ち出しました」(奥谷先生)

授業もチャイム前着席を義務化し、教師もチャイムが鳴る前に教室に入ることを申し合わせた。チャイムと同時に起立、礼をしてから授業に入るというスタイルが、全校に浸透した。制服はシャツの第1ボタンまで留めるよう、身だしなみ指導も徹底した。「そこまでしなくても」という声もあったが、結果的に、生徒にはネクタイをきっちり結ぶ習慣も付いた。

指導の徹底により、遅刻は大きく減少した。13年度には、本誌の記事(12年10月号)をきっかけに学校訪問をした鳥取県立倉吉総合産業高校の取り組みを参考に、「入室許可・遅刻届出証」を導入。遅刻者は、教科担当、学年の生活指導担当、部活動顧問、生活指導室長にそれぞれ報告し、検印をもらった上で担任に提出して教室



写真1(上) 槻の木高校の登校風景。校門前の公道に教師2人が立ち、一般の車や自転車との事故がないよう生徒を誘導する
 写真2(下) 若手教師の発案で生まれたシステム手帳形式の生徒手帳。学習計画や試験の予定なども書き込める



地域への広報活動を通じて 生活指導重視の方針を浸透

に入る。これにより、遅刻数が更に半減した。

中学校や保護者への広報活動も積極的に展開した。中学校や地域の公民館を訪れて学校説明会を開き、中学生とその保護者、中学校や学習塾に「生活指導を厳しく行う」方針を繰り返し説明した。今年年間50回以上の学校説明会を開く。入学前に教育方針を中学生や保護者に浸透させることも生活指導の一環であると位置付けているからだ。学校運営室長の山本尚先生は次のように述べる。

「これまでの勤務校での経験から、こうし

た指導が良いのではないかと考えていた教師も多く、校内での意思統一は徐々に進みました。厳しい指導を前面に打ち出すことで、志願者が減るのではないかと不安もありましたが、実際には入試倍率は上昇しました。保護者だけでなく、生徒も落ち着いた環境を望んでいたのだと思います。真面目に勉強に取り組みたい、でも、周りから浮きたくないという生徒は大勢いて、彼らにとって、生徒全員がきちんとしていることの安心感は、大きな意味を持つのだと感じています」

生活指導の徹底は、厳しさを増す雇用情勢への備えでもあると浅田和也教頭は指摘する。

「社会では、身だしなみや挨拶などによっても人物が評価されます。社会に貢献したい、認められたいという気持ちは、どの生徒も持っていると思いますが、その実現のためには社会人として認められることが前提で、高校での生活指導は重要だと考えています」

授業進度、定期考査、週末課題を教科内で統一し、模試も活用

学習指導も試行錯誤の連続だった。発展的な学習を行っていた土曜講習（国語、数学、英語で毎週実施）は、5期生の頃から授業の復習と宿題の解説に充てるようにした。例年、1年生1学期には100人を超える参加者が、1年生

秋までに20〜30人に減っていたため、生徒のニーズに合わせたのだ。今は、1年生は8割、2・3年生は6割以上が参加する。更に、授業進度、定期考査、週末課題（国語、数学、英語）の内容を、教科内で統一したのも5期生の頃だ。

「本校は単位制なので、各教科の評価がそのまま卒業認定につながります。公平感・公正感が大切で、教師によって評価の仕方や試験の難易度が異なるようなよう、教科内で足並みをそろえることにしました」（山本先生）

ベテラン教師の場合、自分なりの指導スタイルを持っていくものだが、そうした個性はあくまで授業に反映させる。学習指導室長で国語科の片岡弘典先生は次のように語る。

「どの先生も指導にはこだわりがあると思いますが、それを試験で問うのは自己満足ではないでしょうか。私は、思い入れのあることは、授業で説明したり、物事を考える時の観点として示したりするようにしています。生徒には、公正かつ客観的な力を問う試験を課すことが大切だと思っています」

授業進度は週1回の教科会で調整。これは、若手教師の指導力向上にもつながっている。英語科の吉岡隆輔先生は次のように述べる。

「私は簡潔に教えた方がよい部分まで丁寧に教えずる傾向があり、進度が遅れてしまうことがあります。教科会では進度に加えて、指導の相談もさせていただき、授業力を高め

る上でも貴重な時間になっています」

週末課題は家庭学習習慣定着が目的だが、あえて内容を統一し、使用ノートは学校名と校章を入れた「槻の木ノート」とした。ノート点検では、若手教師を中心にコメントも添える。

「皆が頑張っているから自分も頑張れるという生徒は大勢います。同じ内容なのだから頑張ろうという連帯意識を持って課題に取り組み、結果的に家庭学習習慣の定着につながることを期待しています」（平野裕一校長）

模試の活用にも力を入れる。進研模試は1年生から全員受験。意識の高まる進研模試実施の翌日曜日には1日勉強会を実施し、「受験は団体戦」という意識を低学年から醸成する。生徒は模試のやり直しをファイルし、教師も模試結果分析会を実施して、日常の指導に還元する。3年生では、管理職や3学年団を中心に20人ほどの教師で志望校検討会を行う。成績データと共に生徒一人ひとりの顔写真を投影し、第1志望と実現のための手立てを検討共有している。

分掌と学年をつなぐ「学年室」が教師の意思統一を促進

生活指導や学習指導など、学校全体で指導の足並みがそろえる背景には、教師の意識の高さはもちろん、同校独自の組織の工夫にもある。鍵を握るのは各分掌と学年をつなぐ「学年室」だ。

同校の分掌は、「学習指導室」（教務、進路指導）、「生活指導室」（生活指導・保健指導）、「学校運営室」（総務、地域連携、PTA）、「学年室」（生徒窓口、学級経営）の4室体制となっている。学習指導室、生活指導室、学校運営室が立案した企画を、各学年・担任団へ申し送るのが、学年室の役割だ。浅田教頭、学年室長の若林伸治先生、1〜3学年主任の5人で運営する「学年室会議」で、分掌の決定を各学年の実態に応じた内容にして、学年主任から担任へと伝える。

「各分掌と学年をつなぎ、ある学年だけが違う方向に行くのを防いでいます。実現可能性も精査し、担任団の『スリム化したい』『内容を变えたい』といった意見を吸い上げ、各分掌と調整するのも役割です」（若林先生）

学年室には、異動してきた教師に学校方針や指導方法を伝える役割もある。学年室会議で定期的に学年間の意思疎通を行うため、成功事例を他学年に伝承していくことも容易になった。

「梶の木学習candolist」による指導力の向上を構想

開校から10年を迎え、同校は生活指導では地域から高い評価を受け、入試倍率はここ数年、2倍前後で推移している。大学進学実績では、関関同立の合格者数が100人を超え、国公立大合格者も2桁を確保している。そうした同校

に、13年度に赴任した平野校長は「安定は衰退への入口」と警鐘を鳴らす。

「10年の節目は、学校にとって危険な年といわれます。今後は、現状に安住するのではなく、開校当初の精神に戻り、次の10年、20年先に向けた新たな取り組みを充実させていかなければなりません。特に、学習面の質の向上は重要だと捉えています」（平野校長）

現在、平野校長が考えているのは、教科ごとに生徒が身に付けるべき学力と、そのために必要な指導内容を明確にした「梶の木学習candolist」の作成だ。各学期、各学年、あるいは卒業までに、学習指導を通して生徒が出来るようになることを明確にする。それにより、

学校全体で指導力を底上げし、教師の異動があっても一定の教育水準を確保するのが狙いだ。13年度中に2回、学校全体で教科会を開き、これまでの学習を振り返るところから作成に着手する。平野校長は次のように決意を語った。

「これからの学習指導は、暗記中心の学習から生徒が自ら学ぶ学習へと転換していくべきでしょう。そのためにも、先生方一人ひとりが指導力を高め、『個人商店』ではなく『ブランドショップ街』にしていく必要があります。本校には、他校の視察も積極的に行い、既存の取り組みをより良くしていこうとする土壌があります。これからも理想を求めて、青臭く、愚直に進んでいきたいと思えます」

情熱 若手教師が語る、指導変革への

一歩、前に踏み出す力を身に付けさせたい

学校運営室 吉岡隆輔

本校に赴任して驚いたのは、先生方のフットワークの軽さです。新しい取り組みを始める時、不安や不満の声が先に出てしまう場合がありますが、本校では「どうすればより良いものになるか」という前向きな話から始まるのです。

ベテランや中堅の先生方が率先して動かれるので、生徒手帳の提案など（P. 25写真2）、若手教師も新しいことを提案しやすいのだと思います。今後は、私自身も積極的に周囲に働き掛けて、学校全体を活性化させる役割を果たしていきたいと思っています。

本校の生徒の一番の良さは、「頑張っている生徒が格好い」「努力をしている生徒はすごい」と思う雰囲気があるところです。教師の指導を素直に受け入れる純朴さもありますが、その反面、少し難しい課題に直面すると尻込みしてしまうところがあります。「難しそうだけど、頑張ってみよう」というように、自ら一歩踏み出す力を付けさせることがこれからの課題です。

そのためにも、生徒の知的好奇心を刺激する授業を実践し、彼らが自分の殻を破れるように後押ししていきたいと思っています。最初から私が答えを教えるのではなく、ヒントを出して生徒の中から出てくるものを待つ姿勢も必要になるでしょう。生徒の潜在的な力を引き出せるよう、私自身も勉強を重ねて指導力を高めていきたいと思っています。



沖縄県立
読谷高校

進学実績向上

◎「誠実・融和・進取」を校訓として、文武両道を実践できる生徒の育成を目指す。部活動は、ソフトボール部が男女とも全国大会の常連。進学指導にも力を入れており、過去10年間で国公立大合格者数が約30倍と躍進している。

設立	1950(昭和25)年
形態	全日制/普通科/共学
生徒数	1学年約320人
13年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北海道教育大、山形大、群馬大、新潟大、富山大、三重大、神戸大、山口大、九州工業大、宮崎大、琉球大、名寄市立大、都留文科大、沖縄県立看護大、名城大などに62人が合格。私立大は、沖縄大、沖縄国際大などに延べ79人が合格。
住所	〒904-0303 沖縄県読谷村字伊良皆198
電話	098-956-2157
Web Site	http://www.yomitan-h.open.ed.jp/

進路意識の醸成と 模試の徹底活用で 生徒を高い志へと導く

変革のステップ

背景

◎学習習慣が未定着という生徒が多く、進路面でも不本意進学が目立っていた

STEP 1

実践

◎「軌跡のノート」による自学の定着、年間15回の模試を活用した学習機会の増加、意識の醸成などで学力向上を図る

STEP 2

成果

◎国公立大合格者が10年間で、2人から62人に増加。教師の意思統一も進み、学校全体で指導する体制が深化

STEP 3

「ダイヤモンドの原石」「読高プライド」をキャッチフレーズに改革を推進

この10年間で、沖縄県立読谷高校の進路実績は大きく躍進した。2002年度に2人だった国公立大合格者が、06年度には20人、11年度には62人と急増したのだ。「読谷高生はダイヤモンドの原石である」と提唱した仲村守和校長(当時)が着任した02年度から、全校を挙げた進学指導に着手し、同校の改革は始まった。現校長の渡嘉敷通之先生は次のように語る。

「本校の生徒は素直で真面目です。ソフトボール部など全国で戦える部活動も多くあります。力のある先生方が情熱を注ぎ込むことで、原石が磨かれてダイヤモンドとなり、勉強、部活動、行事など、いろいろな面で輝きを放つようになりました。その信念を受け継いできた結果が、今の実績に表れていると思います」

当時は遅刻や欠席の常態化など、生徒指導上の課題を抱えていた。そのため、改革は、部活動を中心に、生徒指導の徹底から始まった。保健体育科の金城学先生はこう振り返る。

「部活動の実績が良くても、礼儀や生活態度が模範的でなければ意味がありません。自分のことは自分です、挨拶や身だしなみをきちんとするという当たり前の指導を徹底しました。部によっては、清掃やボランティア

活動への参加を促しました。そうして顧問を中心生徒指導を進めた結果、数年で学校全体が落ち着いてきました」



渡嘉敷通之 とかしき・みちゆき

沖縄県立読谷高校校長
教職歴34年。同校に赴任して1年目。「人生訓は、『人は大きく、己は小さく、心は丸く、腹は立てず、気は長く』」



平良 忍 たいら・しのぶ

沖縄県立読谷高校
教職歴25年。同校に赴任して6年目。3学年特進クラス担任。「得意淡然 失意泰然」



長濱志保 ながはま・しほ

沖縄県立読谷高校
教職歴20年。同校に赴任して5年目。3学年特進クラス担任。「どんな時も変わらず、生徒に誠意を尽くす」



川平 彰 かわひら・あきら

沖縄県立読谷高校
教職歴19年。同校に赴任して1年目。進路指導部国公立担当。「赴任した学校を自分の母校だと思っ て全力を尽くしたい」



金城 学 きんじょう・まなぶ

沖縄県立読谷高校
教職歴15年。同校に赴任して7年目。保健体育科。「よく学び、よく遊ぶ。自分からいろいろなものに興味を持ち、チャレンジして自ら向上したい」



安仁屋宗一郎 あにや・そういちろう

沖縄県立読谷高校
教職歴13年。同校に赴任して4年目。進路指導部主任。「思考し挑戦せよ。夢はその先にある。未来はその手で掴み取れ」

生徒が落ち着いて学ぶ環境が整い、同校は学習指導へ軸足を移す。07年度に国公立大進学を目指す特進クラスを全学年に設置。10年度には、よなはけんゆう 與那覇健勇前校長が「読高プライド」とキャッチフレーズを掲げ、「進路のしおり」の活用、進路講演会の充実、書く指導の徹底などの諸改革を推進した。08年度に8クラス中2クラスとした特進クラスの躍進に刺激され、一般クラスからも国公立大合格者が出るようになった。

「軌跡のノート」で学習習慣の定着を図る

国公立大合格者は増え始めたものの、生徒の学習習慣には依然として課題があった。進路指導部の川平彰先生は次のように述べる。

「小・中学校を含めた沖縄県全体の課題として、家庭学習の少なさがあります。本校の生徒は、宿題はきちんと提出しますが、教師がチェックしない限り、予習・復習には取り組もうとしません。自学は定期考査直前の復習にとどまってしまうのが実情です」

自ら学ぶ姿勢を育むため、同校は01年度から「ボールペン使い切り運動」を推進してきた。学習に使ったボールペンの数を集計することで、学習量の増加を促し、生徒が達成感を味わう仕組みを構想。ただし、ボールペンの数だけでは学習の「軌跡」が見えてこない。そこで、

10年度に始めたのが「軌跡のノート」だ。

同窓会の援助を得てノート5000冊を用意し、自学用ノートとして生徒に配布。生徒は1冊使い切ったら、学年主任の確認を受けた上で、新しいノートを受け取り、引き続き自学に取り組む。何に取り組めばよいか分からない生徒のために、家庭学習の方法が紹介してある本を勧めたり、生徒に手本にしてほしいノートを紹介したりした。また、ノートの表紙には校章とキャッチフレーズの「読高プライド」を印刷して、全校で取り組む一体感も高めた。

10年度は1学年で300冊以上を使った。毎月2冊を使い続け、東京の国立大合格を勝ち取った生徒もいるという。

現役合格にこだわらず生徒が進みたい道を実現させる

家庭学習習慣の定着と共に重視するのは、進路意識の醸成だ。以前は、進路を安易に決めてしまう生徒が多く、不本意進学をせざるを得ないケースもよくあった。そこで、ここ数年、1年生から進路便りや学年集会、進路講演会などを通じて進路意識の向上を図っている。大学進学によるその後の人生への影響なども、保護者を含めて伝えると共に、偏差値やイメージだけで選ばないように、「なぜその大学なのか」と繰り返し問い、志望理由を明確に持たせるよう

にも努める。3学年特進クラス担任の平良忍先生は次のように述べる。

「面談などでは、大学で何を学び、それを社会にどう還元したいのか、世のため、人のために何をしたいのかを、生徒に繰り返し問い掛けています。大学のその先にある仕事に関するイメージが明確になることで、入試に対する意識が高まると共に、大学卒業後の社会とのかわり方も変わると期待しています」

進路指導に関しては、「現役合格にこだわらない」「生徒の可能性を広げ、生徒が進みたい進路を実現する」という指導方針を共有し、教師間の足並みをそろえた。進路指導部主任の安仁屋宗一郎先生は次のように語る。

「現役合格が望ましいのは確かです。しかし、それにこだわるあまり、県外の大学への進学が難しい理系志望の生徒が、学力が足りないという理由で私立大の文系学部志望変更をすれば、進学しても大学生活に意欲的になれるはずがありません。生徒の進学後の人生にも大きくかわっているという責任感を持ち、生徒が国公立大を志望しているのならば、その実現のための指導をしていくのが教師の役割だと思います」

受験指導も全校体制で臨む。

「小論文指導や面談指導も進路指導部が担当を割り振り、教師全員で担当します。生徒のためにという先生方の思いが1つにまとま

ってきていると思います」(平良先生)

部活動の顧問も、部員一人ひとりの成績や勤怠状況の把握に努める。自らもサッカー部監督を務める金城先生は言う。

「家庭学習の目標時間を設定したり、部員が勉強会を開いたりする部もあります」

3学年特進クラス担任の長濱志保先生は、教師の一体感が生徒との関係にも影響していると感じると話す。

「本校には、生徒のためなら放課後の補習や面談を進んで行う先生が大勢います。生徒に1対1で誠実に対応している姿を見て、『それなら私も』という先生が徐々に増えてきました。そのような教師の姿から、生徒との信頼関係も育まれているのを感じます」

3年生で年間15回の模試を実施 自己採点を基に一言でも声を掛ける

11年度、同校に更なる飛躍が訪れる。10年度に38人となっていた国公立大合格者は、この年、62人に急増し、翌12年度も同数を維持した。躍進の大きな要因の1つは、11年度から進路指導

模試の自己採点表

科目	第1期	第2期	第3期	第4期	第5期	第6期	第7期	第8期	第9期	第10期	合計
英語	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	170
リスニング	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	30
数学Ⅰ・Ⅱ・A	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	120
数学Ⅲ・Ⅱ・B	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	100
国語	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	400
理科	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	180
物理	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	170
化学	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	100
生物	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	100
地理											
公民											
合計											500

模試直後に書く自己採点表。安仁屋先生との面談を待つ間、生徒は前後に並ぶ生徒と自己採点表を見せ合い、話をする。そうした時間も生徒の刺激になるという*学校資料をそのまま掲載(ウェブサイトで拡大できます)

部主任を務める安仁屋先生の提案により始めた模試の回数が増加した。11年度から3年生の模試の回数を出来る限り増やし、2年生3学期から3年生12月までの間に月1、2回のペースで行うことにした。その数は年間15回だ。

模試では、事後指導を徹底して行う。毎回の模試終了後、生徒は学校独自の「自己採点表」(図)を用いながら自己採点を行い、受験後の感想と今後の課題を書く。それを担任が確認した後、安仁屋先生が100人ほどの進学希望者一人ひとりと「自己採点表」を見ながら話す。「化学が下がっているが放課後講座は受けているか」「前回から50点以上、上がったな」と一言にはなるが、アドバイスや励ましを必ず伝える。模試受験を午前、面談を午後など、両者を同日中に行う。

「一人一言の面談では意味がないと思われ

るかもしれませんが。しかし、生徒の立場からすると、いつも自分を見てくれる人がいて、褒めたり叱ったりしてもらっただけで、大きな励みになるはずで、担任と役割分担をしながら、生徒の気質や過去の成績も頭に入れておき、短時間でも心を揺さぶるような言葉を掛けるよう意識しています」（安仁屋先生）

全国を意識し、学習する場として模試を活用

同校が模試を重視するのは、生徒に「全国」を実感してほしいからでもある。

「沖繩の子どもは、全国が相手になると気が後れる傾向にあります。模試を繰り返し受けることで、『自分も全国で戦える』と自信が付くことを期待しています」（長濱先生）
模試前には5分ほどの講話を行い、「今回の受験者は全国38万人です。センター試験受験者の約5人に4人が受けることになるので、力を試す絶好の機会です」と模試の意義を伝える。入試前には「君たちは15回の模試を受けてきました。練習量では他の学校に負けません」と奮起を促す。本番さながらの張り詰めた雰囲気の中で、生徒は全国を意識しながら自分の力を出し切る経験を繰り返し積む。更に、効果的な学習機会の場としても模試を位置付ける。

「模試の解答時間と、自己採点後の面談の

待ち時間に行う自学を合わせて、生徒は1回の模試で9〜10時間は学習します。模試だけで年間130〜150時間の学習になります。また、模試は、毎回切り口が違っただけで、同じ内容を問う場合が少なくありません。生徒も問題を解きながら『あそこで間違えたな』ということを意識しながら解くことが出来るので、結果的に、毎回の模試が前回、前々回の模試の復習にもなります」（安仁屋先生）
苦手科目は勉強しない生徒でも、模試なら1回につき数十分はその科目に取り組み。学習習慣の課題が大きい同校ならではの工夫である。今後の課題は、更に高い志を持たせることだ。

「生徒の潜在的な希望から考えれば、国公立大を目指す生徒が3年生でもっと多くてもよいはず。1・2年生時から生徒の意識を高めて、成績上位層を育て、センター試験受験者を増やしていきたいです」（川平先生）

同校が今以上の飛躍をするためには、教師の更なる奮起が必要だと渡嘉敷校長は指摘する。「今後は学習、部活動ともに実績を出せる、真の文武両道を目指したいと考えています。これから新しく赴任される先生には、既存の指導をただ行うだけでなく、生徒のために何が出来たかを自分で考え、開拓していく意識や力を養うことを期待しています。そのための方向付けや適材適所の組織づくりが、校長としての私の役目だと思っています」

情熱 若手教師が語る、指導変革への

諦めなければ 突破口は必ず見付かる

進路指導部主任 安仁屋宗一郎

20代前半、私は医師を目指して、医学部入試に何度も挑戦しました。しかし結果は不合格。再び挑戦することもありましたが、夢を諦めざるをえず、人生を否定されたような気持ちになりました。その後、数学の教師になり、進路指導を担当するようになりましたが、受験勉強に没頭した時間、挫折の経験は私の人生の糧になっています。

私は夢を諦めるつらさを知っています。だからこそ、生徒には浪人してでも夢を追求してほしい。たとえ失敗しても、夢に向かって努力したことは無駄ではありません。どこからでも再出発は出来る。そうした勇気を生徒に与えたい、どんな生徒でも決して見限らないという思いが、進路指導の原動力になっています。

かつては指導に意気込むあまり、他の先生から「やり過ぎ」という言葉をいただくこともありました。全国の若手の先生の中にも、今の指導に悩んでいる方がいらっしゃるかもしれません。しかし、方向性が間違っていなければ、助けてくださる先生、支持してくださる保護者は必ず現れます。若手の先生も、時には先輩に心の内を明かしてみてもどうでしょうか。また、ベテランの先生方にも若手の言葉に耳を傾けていただきたいと思います。大切なのは、生徒のために何が出来るのかを考え続けること。方向性さえ誤らなければ、必ず突破口は見付かると信じ、これからも生徒の笑顔を見るために、指導に打ち込んでいきたいと思っています。

「もっと響く指導」にするために！

生きたデータの徹底研究

「データ」を活用して客観的に生徒の状況を捉え、指導の方針を整理する方策を伝えてきた「生きたデータの徹底活用」。さらに響く指導を実現するために、現場の先生方と改めて指導のポイントを確認し、「データ」の改良を検討します。

テーマ 2年生0学期の意識付け

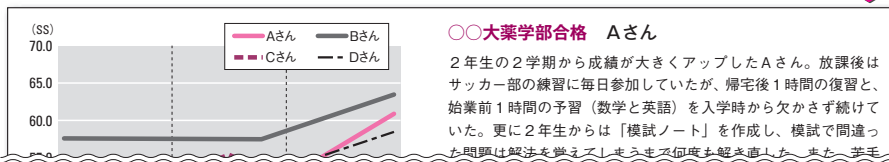


「生きたデータ」2011年12月号を参考に、2年生0学期の指導に取り組んだところ……

図1 保護者向け「2年生の意義」確認シート

	1年生との違いと2年生の意義	保護者へのお願い
部活動	後輩たちを引っ張りながら、自分たちの力で集団を高めていく。	大会や発表会前に部活動中心の生活になってしまうのは、集団に対する責任を全うしようとしている表れでもあります。人間的成長と捉えて応援してあげてください。ただ、食事を一緒に取る、決められた家事手伝いをするなど、それぞれの家庭のルールはきちんと守らせて、家族との生活も集団生活の一つであることを教えてください。
	目標に向けてやり抜くエネルギーを、	部活動を大切にしながら、最低限の家庭学習は続けるように指導しま

図2 2年生の大切さを伝える卒業生の体験談



私の狙い

目指すべき「2年生像」を保護者に伝え、「チーム」として指導が出来る体制をつくりたかった

取り組み内容

2年生という時期の特性、1年生との違いを先輩の声などを通じて伝え、家庭でのサポートをお願いした

感じた課題

取り組み自体の意味はあった。だが、生徒に2年生への見通しを持たせる工夫が必要だった

「もっと響く指導」のポイント

1

高1の達成度を客観視し、自らすべきことに気付かせる



2年生で生徒の学習意欲が停滞したり、成績の二極化が進んだりするのは多くの高校に共通する課題です。高校生活に慣れるのは良いことですが、その「慣れ」を「ダレ」にさせず、主体的な学習態度につなげ、2年生進級を迎えさせたいと思いました。そこで保護者に、2年生の意義と春休みの望ましい過ごし方を伝え、教師と一体になって子どもを支えることを求めました。実際、2年生になってからの保護者とのコミュニケーションは円滑に進みましたが、**肝心の生徒の意識はさほど高まらなかった**のです。



この時期、1年生は他の時期よりもテストや模試を受ける機会が少なく、その一方で休日が増えていきます。自分で自由に過ごす時間が多くなる分、ダレてしまうか、あるいは自律できるか、その違いは2年生になった時に大きな成績差となって表れます。「**2年後の入試に向けて今から準備を**」と訴えるだけでなく、**生徒に「この時期の重さ」を伝えたい**ところです。



教師も高校入試の準備などでますます多忙になる中、高校生らしい主体性を2年生0学期に発揮させていくにはどうすればよいのでしょうか。



ややもすると「これから先のこと」ばかりに生徒の目を向けがちですが、まず**1年生での成長を振り返る**機会をつくってみてはどうでしょうか。

若手先生代表

四国地方の公立高校に勤務。13年度、2年度目の1学年担任。



A先生(30代)

中堅先生代表

中国地方の公立高校に勤務。13年度、4年度目の1学年担任。



B先生(40代)

※このコーナーは、高校の先生方（今回は中国・四国地方）との検討会の内容を基に構成しています。



「2年生になると成績の差が開いてしまう」「1年生の基礎が固まっていないと受験勉強がスムーズに始められない」などと生徒に力説しても、なかなか実感を持って受け止めてもらえないのが現実です。危機感をあおる以外に方法はないのでしょうか？



「もっと響く指導」のポイントと「生きたデータ」改訂案

自己の成長と課題を振り返るシート

ダウンロード

◎12月までを振り返って自己評価しよう

- ①家庭学習は毎日決まった時間に開始している 4点 3点 2点 1点
1段階アップするためにはどうすればよいと思う？
- ②1日3時間の家庭学習時間が確保できている 4点 3点 2点 1点
1段階アップするためにはどうすればよいと思う？
- ③担任との面談で立てた計画に従って勉強している 4点 3点 2点 1点
1段階アップするためにはどうすればよいと思う？
- ④苦手科目・分野の克服に継続的に取り組んでいる 4点 3点 2点 1点
1段階アップするためにはどうすればよいと思う？
- ⑤定期テストや模試の見直しを行っている 4点 3点 2点 1点

自己評価の内容は、各校の生徒の状況や12月までの指導に応じて変わる。これは学習習慣に重点を置いた内容だが、学校によっては「遅刻をしなかった」「提出物を期限までに出した」「携帯電話の使用に関する約束を守れた」などの生活習慣を中心に振り返ることも出来る

◎高校生になって成長したと思うこと、課題だと思うことを書こう

成長したと思うこと

課題だと思うこと

データを生かす指導の流れ

まずは学年団で「自校の生徒にこの時期までに出来てほしいと望むこと」を言語化し、振り返りシートの評価項目を設定することから始まる。

- 1 「2年生0学期までに出来ていること・出来ていないこと」を生徒にチェックさせる。
- 2 生徒が書いた内容を面談などで確認する。出来ている部分を認めながら、さらにレベルアップするための行動を共有する。
- 3 整理した内容を基に「どんな2年生になりたいか」を考えさせる(35ページ参照)。

「もっと響く指導」のために改訂すると...



今、高校生として「出来ている」ことを確認し、その上で、2年生になるまでに更に何が出来るようになればよいかを可視化することで、生徒の2年生0学期の課題意識が具体的になるように思います。出来ていることが確認できるからこそ、出来ていないことを受け止められ、生徒はこれから考えられるのだと思います。いわば「振り返りがもたらす推進力」です。まず、学習面と生活面それぞれで4月から学校が求めてきたことについてどれくらい出来るようになってきているか、生徒自身がチェックします。そして、もう1つ上の段階に行くには何を变えればよいかをイメージするところまでを第1段階と考えます。



確かに、中学生から高校生になったことでの成長は、それぞれの生徒に確実にあるわけですよね。不足している面に目を向ける前に、自分の成長に向き合う機会をつくるという発想は私にはありませんでした。1年生の達成度を振り返ることで、2年生への準備につなげていくのですね。

以前、生徒に書かせた学習計画には、1年生の学習を総括させる意味もありました。しかし、生徒には「この時期に計画する」ことの意味が伝わらなかったようで、生徒の目標や計画も漠然としたもので終わってしまいました。



「生きたデータ」2011年12月号を参考に、
学習計画を立案させたところ……

「もっと響く指導」
のポイント

2

図3 「文理の内定期間」の家庭学習計画

1年 組 氏名 _____

●選択した方に○を [文系] ・ 理系]

●志望大 第1志望 A大学経済学部 第2志望 B大学経済学部

●入試科目 (センター: 国、教、英、地歴公民、理) (センター: 国、教、英、地歴公民、理)
個別: 国、教、英 (個別: 英)

●模試成績から明らかになった「頑張るべき教科・科目」

●頑張っても克服する教科・科目 数学 ●頑張ってもっと伸ばす教科・科目 英語

●その学習法 _____ ●その学習法 _____

私の狙い

文理が「内定」したことでの意識の高まりを基に、受験を見据えた今後の学習計画を立案、実践させたかった

取り組み内容

志望大と自分の学習状況からこの時期に必要な学習を考えて、計画を立てさせた

感じた課題

全体的に抽象的な記述になってしまい、具体的な行動に結び付かなかった

なりたい2年生像から逆算し、
日々の行動をマネジメントする力を付ける

以前は生徒に「2年生0学期は文理の内定期間」「文理選択で高まった意識を学習へつなげよう」と訴えましたが、生徒には伝わりにくかったようです。

2年生0学期の課題を考える時も「2年生になるのだから」と焦らせるのではなく、「1年生でこれだけ出来るようになったと、自信を持って2年生進級を迎えよう」と伝えると、生徒も前向きに取り組めるのではないのでしょうか。

確かに「志望大を書き、学習計画を立てる」という活動には既に取り組んでいますから、生徒は「またか……」という感覚なのかもしれません。

この時期、生徒に身に付けさせたいのは、状況を見極めて具体的に中期の計画を立てられる、マネジメント力だと思います。進路研究などもあって気ぜわしくなる2年生では、計画力とやりきる力が重要です。学習時間の教科バランスを確認しながら、2年生4月から逆算して3か月を過ごす経験は、そうした力の養成の場になります。

ただ、「どんな2年生になりたいか」を生徒が考える時に、内容が部活動や学校行事のことばかりになってしまうのではないかという気もします。

以前、先生が保護者へ配布したような「先輩の体験談」や、学校が蓄積している合格体験記を活用するとよいでしょう。自分をマネジメントしたから成功した先輩の体験談により、学習面や生活面にも目を向けさせたいですね。



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ダウンロードできます!

生徒指導・進路指導ツール集

ベネッセ教育総合研究所

<http://berd.benesse.jp>

生きたデータ

検索

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも同じウェブサイトでご覧いただけます。併せてご利用ください!

HOME→教育情報→高校向け→

生徒指導・進路指導ツール集をご覧ください

2010年度12月号「目標とのギャップを埋める2年生0学期への意識付け」
2009年度12月号「『2年生0学期』を見通した1年生2月までの学習習慣の定着」
2007年度2月号「2年生0学期の意識付け」



「もっと響く指導」のポイントと「生きたデータ」改訂案

目標とする2年生像から今すべきことを逆算するシート



◎先輩の「2年生で取り組んだこと」を読もう

A先輩 (S大学経済学部合格)

2年生になって一番力を入れたことは、バスケットボール部の練習です。次に力を入れたのは学校祭の模擬店の準備です。高校3年間を振り返っても、2年生が一番充実していました。でも、部活の練習が毎日あったので、勉強の時間は平日は1、2時間しか確保できませんでした。だから、僕が重視したのは、苦手科目をそのままにしないことです。特に成績があまり良くなかった数学は、たとえ短時間でも、その日の授業ノートの見直しだけは欠かさないようにしました。このノートの見直しの時間を毎日確実に確保するために、夕食前30分間を数学の学習に充てることにしたのです。正直「数学の勉強は嫌だな」と思うこともありましたが、「これを頑張れば晩ご飯だ」と自分を励ました。母にも「数学の勉強を怠けないためにも、夕食の時間を出来るだけ同じ時刻にしてほしい」と頼み

◎先輩の体験談を読んで、君はどんな2年生になりたいと思った?

◎では、2年生になるまでの3か月の目標は何だろう?

◎上の目標を達成するために毎日を過ごし、記録してみよう。()内には教科ごとの学習時間を記入しよう。

18	19	20	21	22	23	24時	国	数	英	理	地
月	—	—	—	—	—	—	()	()	()	()	()
火	—	—	—	—	—	—	()	()	()	()	()

データを生かす指導の流れ

生徒が「これまで」を振り返り、「これから」を考えられるようにする。目標に向かって自律を試みる中で、保護者にも家庭生活でのサポートを求めていく。

1 これまでの振り返り(33ページ参照)と先輩の2年生時の体験談を踏まえて、なりたい2年生像と2年生0学期のテーマを考えさせる。

2 生徒が目標達成を意識した上で、家庭学習時間や生活習慣を記録することで、マネジメント力を育む。

3 保護者向け配布物の中で、食事時間や就寝時刻を固定し、生活リズムをつくることの大切さを伝える。

「もっと響く指導」のために改訂すると...



学習計画ではなく、**学習の記録を付けるのは、「今日1日の過ごし方が、3か月後の自分のためになっているか」を日々問い直せると思うから**です。また、「これだけはやった」という実感も得られると思います。



学習時間だけでなく、**食事の時間や就寝時刻も記録して、自分の生活パターンをどれくらい確立できているかを確認させてもよい**ですね。



前は保護者への発信はうまくいったということですが、今回の生活記録に食事の時間や就寝時刻を盛り込むことで、保護者にも関心を持っていただければ、家庭での更なるサポートも期待できると思います。

そして、**学習面での頑張り**が今ひとつの生徒でも、**生活面での成長を実感して進級できればよい**ですね。勉強時間がたとえ30分でも、学習開始の時間が固定できればそれも小さな成長ですから。2年生0学期までの振り返り、そして2年生0学期以降の記録の両方とも、**自校の生徒の特性に応じて、重点を置く内容は変えるべき**でしょう。

半歩⁺未来⁺を考える 教育オピニオン

技術革新で激変する 未来社会を生き抜く力とは

国立情報学研究所情報社会相関研究系教授、社会共有知研究センター長

新井紀子

コンピューターに人間の仕事が奪われる……。情報技術の進歩によって、そうした社会が現実のものとなりつつある。イノベーションが人々の生活や考え方を大きく変える時、激変する社会をどのように生き抜いていけばよいのだろうか。文部科学省「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」で提言をしている、国立情報学研究所の新井紀子教授に聞いた。

コンピューターが 人間の仕事を奪う？

情報技術の進歩によって、人間が行ってきた仕事の多くを機械が行うようになりつつあります。労働が機械に代替されるといふと、多くの人は工場のライン生産方式などの単純作業を思い浮かべるかもしれませんが、ホワイトカラーの仕事も機械にとって代わられているのが近年

の特徴です。既に、アメリカの証券取引所では、株売買の6〜7割がコンピューターによる自動取引になっています。24時間、コンピューターがさまざまな情報を基に戦略を立てて、自ら売買を行うのです。日本の証券取引所における自動取引の比率は4割程度ですが、今後かなりの数のトレーダーが職を失うといわれています。トレーダーが数十年間、証券業界で培ってきた経験やノウハウが、コンピューターの発達によ

政府が掲げる 人材育成戦略とは

◎教育再生実行会議が2013年5月に公表した「これからの大学教育等の在り方について」（第三次提言）において、教育改革の柱の1つに、イノベーション創出のための教育・研究環境づくりが掲げられた。

取り組みの中心は、大学・大学院改革だ。技術と経営を俯瞰できる人材の育成を図るための文理横断型プログラム開発の支援、全ての学生が文系・理系の基礎知識を習得する取り組みの促進、世界で活躍するビジネスパーソンを育成するための経済・経営系学部・大学院のカリキュラム改革、大学院の研究費や研究スペースの確保など若手研究者のための環境整備、産業界・国による博士課程修了者の採用の促進などである。理系のみならず文系学部にも言及されている点、大学院修了後の身分保障にまで切り込んでいる点が特徴だ。

初等中等教育については、次のような取り組みを提言している。理数教育強化のための専科指導や少人数教育、習熟度別指導のための教員配備や設備等の充実、スーパーサイエンスハイスクール等の総合的な取り組みの推進、「全国学力・学習状況調査」における理科の調査の定期的な実施などだ。



り一気に価値を失ってしまうのです。

もちろん、証券取引には機械では代替できない高度な勘やスキルなどにも必要です。そういったものを身に付けた一部の人の雇用は維持されるでしょう。しかし、機械は24時間寝なくても疲れませんし、単純な判断ミスもしません。知見はどんどんデータとして蓄積され、使えば使うほど精度が高まります。更に、ソフトは複製が容易なため、育成のコストもかかりません。長期的に見れば、機械の方が経済効率が良いので、雇用を抑えた方が望ましいことになりました。

営業担当者も、特定の業界では既に必要ではなくなりつつあります。例えば、大手ネットショップでは、商品の販売から顧客への情報提供、在庫管理まで全てコンピューターが行い、物流は外注されています。その物流も変わって

きていて、倉庫内を走る車はコンピューターによる自動制御であり、商品を棚から下ろす単純作業だけが人手で行われます。これも機械化は可能ですが、商品が頻繁に入れ替わるためコストの問題でそうしているだけなのです。

日本での賃金も

世界の最低水準に下がり得る

加えて、企業のグローバル化がこうした傾向に拍車をかけています。日本語の文章をスキヤナーで読み取り、テキストデータに加工するサービスがあります。校正は中国の工場、日本語が分からない中国人の従業員が行っています。ここでも、データ作成は主としてコンピューターが行います。オペレーターは、コンピューターが判別できない文字がある時にその形を見て、入力するだけです。サービスの主要部分をコンピューターが行い、人間はその修正を行う。日本語の文章をデータ化するような仕事も、今や機械や日本語の分からない外国人が行っているのです。

日本でしか出来ない仕事なら、ある程度の賃金が保証されますが、同種の仕事が海外の労働者でも出来るのなら、賃金の安い海外で行う方が経済的です。最低賃金制度はありませんが、企業の海外移転が更に進み、国内雇用の確保が優先されれば、同じ仕事の対価は世界の最低賃金にまで落ちるかもしれません。グローバル化により、知的な仕事まで海外に奪われ、賃金も下落するという事態が起こり得るのです。

現在、日本の失業率が低下しているのは、東日本大震災後の復興事業などで労働力を吸収している要因が大きいと思います。今後、多くの業種・職種で海外移転が進めば、景気が上向いても雇用が増えない状況が考えられます。

情報技術の発達によって新しいビジネスが生まれているのだから、新規産業で余剰人員を吸収できるという見方もあります。問題は、新たに生まれる雇用と機械に代替されて失われる雇用のどちらが大きいからです。既にアメリカでは、景気が上向いても失業率が下がらないという、経験したことのない事態が起きています。最も多くの産業を作り出してきたアメリカさえ、失業者を超える新規雇用を生み出せていないことは冷静に捉えなければなりません。

技術革新を生む人材は

確率的にしか存在しない

こうした厳しい環境変化の中で、イノベ

あらい・のりこ◎イリノイ大大学院数学科博士課程修了。広島市立大助手、プリンストン高等研究所客員研究員、国立情報学研究所助教授などを経て、現職。文部科学大臣表彰情報処理推進機構日本OSS奨励賞など受賞歴多数。主な著書に『コンピュータが仕事を奪つ』（日本経済新聞出版社）、『生き抜くための数学入門』（イースト・プレス）などがある。

シオンを起こせる人材をどのように育成しているのかは大きな課題です。

現在、イノベーションを起こせる人材を育成するための効果的な教育手法は、世界でも見付かっていません。マサチューセッツ工科大などの有名大学では、講義や教材をインターネット上に無償公開し、教育を受ける母集団を拡大させて世界中から高い能力を備えた人材を集めようとしています。イノベーションを起こせる人材が確率的にしか生まれない、教育で育て上げるのは難しいと暗に認めているといえます。

私も教育者ですから、元々能力のある人間だけが掘り起こされるとは思いたくありません。しかし、大学で教える中で、目を輝かせて授業を受けているのに、内容が理解できていない学生がいるという経験を何度もしてきました。逆に、それほど手を掛けなくても、自分で学習し、深いところまで理解していく学生にも出会ってきました。

高校の数学の先生とお話をした時、「生徒が真面目に取り組みさえすれば、試験問題を解く力を高めることは出来ます。しかし、微分・積分はなぜ存在し、どのような時に使うのか、それが使えない時はどういう統計分析を使うのかといった『世界観』を持った生徒は、意図的に育てられる気がしない」とおっしゃっていました。イノベーションを起こせる人材が確率的にしか生まれないことは、先生方も経験的に感じ

ていらっしやるのかもしれませんが。

物事の法則性を 見いだす力が必要

計画的にイノベーションを起こす人材を育てるのは難しいとしても、社会がどのように変化しても対応していける力、自分で進むべき道を切り拓いていける力を付けるために、教育がなすべきことはたくさんあります。仕事が機械に代替されれば、職を失った人は別の業界に移らなければなりません。しかし、イノベーションによってどのような産業が消えていくのかを予測できない以上、これからの社会では、自分の経験やスキルを別の仕事に生かせる力が必要になるはずで

例えば、職を失ったトレーダーが、培ってきた分析力を生かして企業コンサルタントを目指すとしたら、「トレーダーや株の自動取引ソフトは、〇〇の指標を見ているので、このように事業を改善すれば株価の上昇が期待できる」というように、自分の知識の枠組みを別の業界に当てはめて生かすことが出来れば、活躍の場が広がるでしょう。もちろん、前の業界の知識・技術がそのまま使えるとは限らないので、生涯学習への動機付けを早い段階から行い、さまざまな学習機会を利用して足りない知識・技術を補う経験をさせておく必要はあります。

元々持つノウハウを別の仕事に生かす際、必

要になるのは自分の仕事を「フレーム」として捉え直す力です。自分の仕事を1つ上の次元から眺めて、どんな内容なのかを理解し、別の利益を生むような仕組みに見直す力で、コンピュータは置かれたフレーム内で力を発揮しますが、フレームを外から見直すのは苦手です。不要な知識や情報をそぎ落とし、自分の知識・技術の体系を「フレーム」として捉えてはじめて、幅広い業界に対応できる力になるのです。

そのためには、物事を抽象的に捉えて、いろいろな物の中にある法則性や共通点に着目する訓練が必要です。数学の学習ではその訓練が出来ますが、意識している生徒は多くありません。今の大学生は、教員が板書をきれいにしてくれないので何を写してよいか分からない、論文を読んでも要旨がつかめないとよく言います。いろいろ議論をし、それぞれの意見のポイントが書かれてあるのに、「結局、答えはどっちですか」と聞く学生が、いわゆる偏差値の高い層でも見受けられます。雑然とした板書の中から必要な部分を書き出す、議論の要点をつかむことは、余分な情報を取り除いて「フレーム」にする作業と通じます。そういった訓練を高校を卒業するまでに行っておいてほしいと思います。

最適な方法を考え 試行錯誤する訓練を

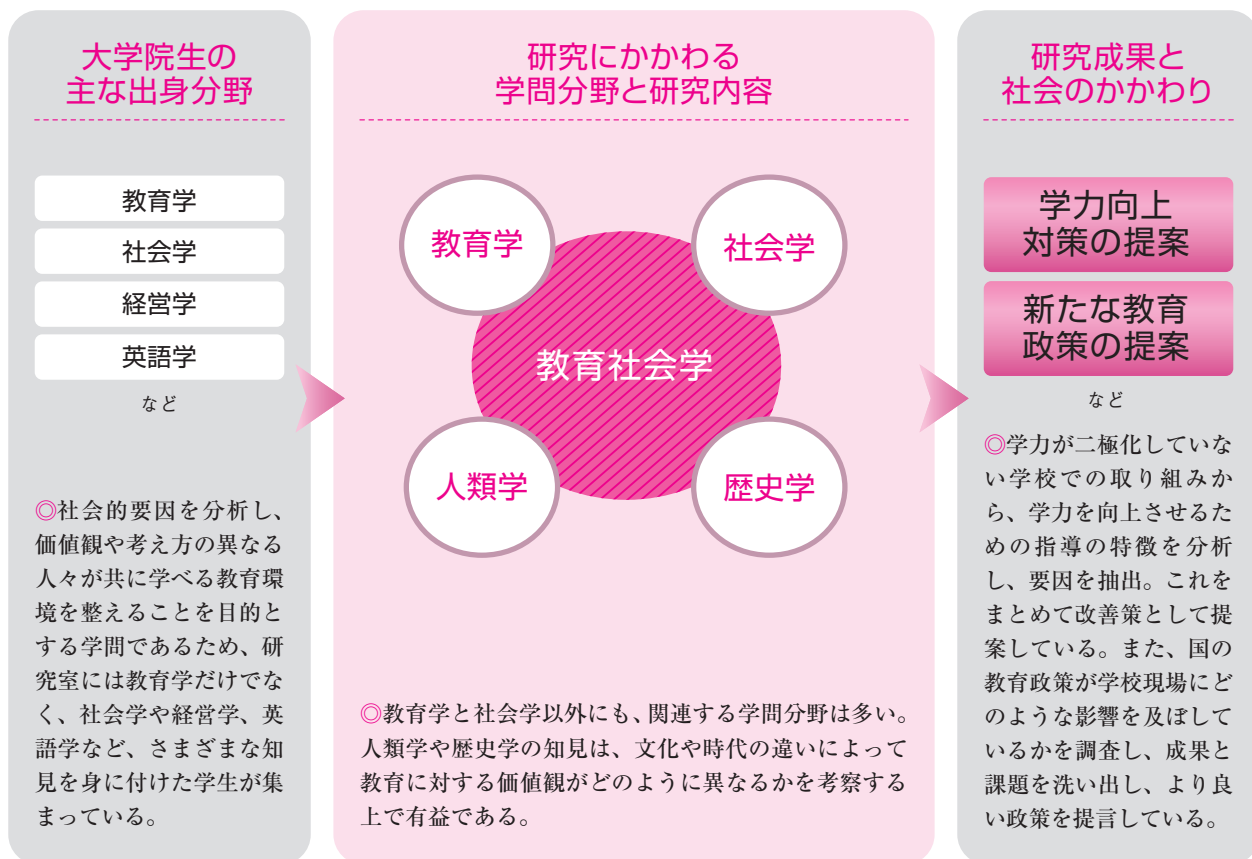
今は多様な教育サービスが溢れて（あふ）います。学

全国の学校の取り組みを分析し 子どもの学力を高める方法を追究

大阪大大学院 人間科学研究科 しみずこうきち 志水宏吉研究室

教育社会学は、経済構造や家庭環境などの社会構造から、教育が抱える問題の要因を突き止め、改善しようとする学問だ。大阪大大学院人間科学研究科の志水宏吉教授は、学力低下は成績下位層を中心に生じていると指摘し、その要因の1つに家庭の社会的な階層格差があることを挙げる。階層にかかわらず、学力を向上させるための方法を研究するために、高い学力を身に付けさせている学校の取り組みから指導の特徴を抽出している。

フローチャートで分かる志水宏吉研究室



マイノリティーの立場に共感し、社会を変えようとする意志が必要

教育社会学が求める学生像

人間への興味

マイノリティーへの共感

社会問題に対する広い視野

人間が人間に対して行う教育を研究しています。そのため、研究領域にかかわらず、教育に携わろうとする者には人間への興味があることが必須です。

教育社会学では、研究室の外に出て、学校現場や児童・生徒を直接観察しなければなりません。考え方や価値観が異なる多様な人とかかわることが多いため、教育の他領域以上に人間に対する強い関心と人間を理解しようとする姿勢が求められます。

また、階層、家庭環境、経済格差など、さまざまな社会的要因を分析しますから、社会問題に対する好奇心を持ち、探究することが欠かせません。教育の影響は生活のあらゆる場面に表れるため、特定の人の意見や考え、物事にとらわれるのではなく、社会全体を見渡せる広い視野を身に付けておいてほしいと思います。

社会制度に不備を許さない正義感も大切です。心身に障がいがある人、経済的貧困層などのマイノリティーが教育に何を期待しているのかを感じ取り、彼らの要望が実現するように、社会に働き掛けていこうとする思いが必要です。

高校生へのメッセージ

高校時代は、精神的に最も純粋に好きなことに打ち込める時期だと、私は思います。勉強でも部活動でも構いませんから、自分がこれだと思ったことをとことんやり抜いてみましょう。その中で得た「成し遂げた」という自信は、将来どの道に進むにしても皆さんを支えてくれるはずですよ。



志水宏吉 教授

しみず・こうきち 大阪大学大学院人間科学研究科教授。大阪大博士課程教育リーディングプログラム「未来共生イノベーション」博士課程プログラム「コーディネーター。東京大学大学院教育学研究科博士課程修了（教育学博士）。大阪教育大助教授、東京大助教授などを経て、現職。主な著書に『学校にできること―一人称の教育社会学（KADOKAWA）』、『検証 大阪の教育改革』（岩波書店）など。

研究を始めたきっかけ

家庭環境などの教育への影響力を身をもって感じた

教育社会学とは、社会のあり方が教育に及ぼす影響を考察する学問です。私は東京大に入学して間もない頃にこの学問に触れ、自分の生い立ちと現在の関係が解き明かされていくような感動を覚えました。

私の生家は、兵庫県西宮市の材木店です。両親も同居していた祖父母も、いわゆる高学歴ではないものの、知らないことを学ぼうとする知的好奇心が旺盛でした。信仰上の理由からではなく、キリスト教に興味があるからと、教会に通っていた父の姿を覚えていた祖母の姿は、特に印象に残っています。こうした家族の背中を見て育つたためか、私も自然と学校の勉強が好きになりました。

小・中学校は地元の学校でしたが、高校は岐阜県の全寮制の私立校の普通コースを選びました。男女共学であることなどに惹かれたのです。入学するとサッカー部に入部し、練習に明け暮れていました。ただ、授業

研究概要

学力低下の実態を解明し 解決策を探る

を集中して聞いていたので、成績は良好でした。半年ほど経った頃、私は英語科主任の先生に呼ばれ、進学コースに移ることを強く勧められました。進学コースは学習量が多く、部活動の時間が少なくなります。私は断ろうと思いましたが、その先生は熱心で、「志水、一緒に東京大を目指そう」と私を説得しました。それまで私は、東京大への進学など考えてもいなかったのですが、それほど期待されているのかと驚く一方、期待に応えたい、挑戦したいという気持ちが日に日に高まり、進学コースに移ることに決めました。

家庭環境や教師の期待などが、子どもの教育に大きく影響することを、私は身をもって感じました。その感覚を学問的に裏付けたいと、私は大で教育社会学を志したのでした。

私が力を入れている研究の1つは、学力格差を解消する方法を見いだすことです。柱は2つあります。

1つめは、学力低下の実態を把握

することです。1990年代の終わり頃から、学力低下がマスコミなどで話題になるようになりましたが、データによって十分に証明されているとは言えない状況でした。

そこで、私たちは、過去に行われた学力や学習状況などについての調査と、対象や設問などを同じにして改めて行った調査の結果を比較することにしました。2001年に大阪府の小・中学校十数校の小学5年生と中学2年生を対象に調査した時は、1989年の調査と対象校、学年、設問をそろえて行いました。結果を見ると、89年に比べて、成績上・中位層の得点はさほど変わりませんでした。下位層の得点は明らかに低くなっていました。つまり、全体的に学力が低下しているのではなく、二極化が進んでいたのです。

更に、01年の調査結果を分析すると、学力の二極化は家庭の「文化的階層」と密接に結び付いていることも分かりました。「文化的階層」が上位の家庭ほど子どもの学力が高くなる傾向にあったのです。階層によって学力に格差が生じているのは、日本だけではありません。アメリカ

やイギリスなどでもそれが社会問題になり、行政も解決に向けて動いています。そうした海外の政策にも注目し、成果と課題を検証しています。

一方、私たちの調査からは、保護者の「文化的階層」にかかわらず、学力の二極化を克服している学校があることも見えてきました。教育社会学では、そうした学校を「効果のある学校」と呼んでいます。学力がどのように低下しているのかを確かめてこそ、それを解決するための方法を検討することが出来るのです。

研究の2つめの柱は、この「効果のある学校」を全国から見付け、そのでの取り組みを他校に広めることです。ただ、地域性や学校文化などが異なりますから、ある学校で効果のあった取り組みを別の学校で行っても、うまくいくとは限りません。地域や学校の特性に適する形に変えて取り組めるように、効果が上がる要因を抽出しています。

研究からは、どの「効果のある学校」にも子どもと教師との強固な信頼関係が共通して見られることが分かっています。学力低下に悩む学校では、ここに目を向けて改善を図る

ことも、学力を向上させる鍵になると考えています。

研究の成果と展望

他校への参考として「効果のある学校」の指導の特徴を抽出

「効果のある学校」の取り組みを、他校で応用しやすくしようと、私たちは08年に「スクールバスモデル」を発表しました。「気持ち

のそろった教職員集団」「戦略的に柔軟な学校運営」など、大阪府内の「効果のある学校」に共通する指導の特徴を8つ抽出し、解説した図表です。私が校内研究などに招かれた時は、これを示しながら講演をしています。

日本の教育の現状では、残念ながら、保護者が属する社会階層による不利益を子どもが被ることがあります。学校現場を訪問し、先生方と話す度に、「全ての子どもに確かな学力をもたらすという、公教育の目的を果たしたい」という熱意を感じます。教育社会学を研究する私には、この願いを実現させる使命があります。今後も研究を続け、1日も早くそれを果たしたいと考えています。

用語解説

① 文化的階層

文化面に着目して分類した、保護者の属する社会階層。ここでは、01年の調査に設けた「家の人はテレビでニュース番組を見る」「家の人が手作りのお菓子を作ってくれる」「小さいとき、家の人に絵本を読んでもらった」「家の人に博物館や美術館に連れていってもらったことがある」「家にはコンピューターがある」の5つの質問項目への回答を、それぞれ主成分分析によって、「上位」「中位」「下位」の3グループに分けたものを指す。なお、社会階層は文化的階層の他に、職業階層、収入階層、学歴階層などさまざまな分類が可能である。

〈ヤンチャ〉な生徒を受け入れる社会を目指して



知念 渉さん

ちねん・あゆむ 大阪大学大学院人間科学研究科博士
後期課程3年。沖縄県立知念高校卒業。

Q なぜこの分野に進んだのですか

A 大学に入学した頃は小学校の教師を目指していましたが、2年生の時、研究者になろうと思うようになりました。学校で流行する服装、人望を集める生徒の気質などについて考察する、生徒文化という研究領域が教育社会学にあることを知ったのがきっかけです。

高校時代、おしゃれ好きが昂じて、繰り返し服装指導を受けていた私は、大学入学後も、「なぜ自分は

しつかり制服が着られなかったのか」と考え続けていました。この疑問に対する答えを見付けられるかもしれないと思ひ、教育社会学の研究を志したのです。

Q 志水先生の研究室での研究内容を教えてください

A 〈ヤンチャ〉な生徒、いわゆる不良少年の文化について研究しています。取り組み始めたのは、5年前、修士課程1年の時です。当時、大阪府内の高校でフィールドワークを行っていた私は、ある高校で問題行動をとる20人ほどの男子生徒のグループに出会いました。それ以来、彼らへのインタビュー調査を続けています。全員が社会に出た今でも、定期的に顔を合わせて近況を聞いています。

高校中退か卒業かを問わず、彼らの多くはホストや建設現場での作業職に就きました。家庭が経済的に貧しく、腰を据えた就職活動がしにくいことなどから、先輩や友だちのつてを頼って職を探した結果です。

修士論文では、彼らの学校経験や将来展望について分析しました。彼らが意外にも学校の教師を信頼して

いることや、自らの置かれた環境と将来展望をすり合わせていく過程について論じました。

高校を中退あるいは卒業後、彼らはどのような職業に就き、どのような家族を形成していくのか。博士論文では、これを主要なテーマにする予定です。〈ヤンチャ〉な生徒の文化やライフスタイルが形成される要因が見えてくれば、彼らが違和感なく過ごせる学校や社会をつくることにもつながると期待しています。

Q 高校生へのメッセージをお願いします

A 大学に入学してからの私は、高校時代に比べて、ずっと勉強が好きになりました。自分の興味があるテーマの研究に取り組

み、それを充実させるために学ぶという意識を持てるようになったからだと思います。研究に必要な英語の文献を思うように読めない時などは、「高校でもっとしつかり勉強しておけばよかった」と後悔します。

私のような思いをしないよう、皆さんには、今、学校で学んでいることをしつかり身に付けてほしいと思います。ただ、私が言うだけでは将来とのつながりが見えにくく、意欲が高まらないかもしれません。そこで、提案があります。興味のある学問について、研究者が書いた一般向けの本を読んでみませんか。研究にどのような知識が求められるかを知ることができ、学ぶ目的をつくるのにきつと役立つと思います。

私の高校時代

現在の研究に役立っているバンド活動での経験

●高校に入学して間もなく、私は友だち4人でバンド活動を始めました。ライブハウスでは、他校のバンドとも交流しました。初対面の人と演奏の順番や持ち時間を交渉して決めることが多く、他者の要望に応えながら、自分の要望も通していくためには何が必要かを学びました。

2年生の終わりまではバンド活動に没頭していましたが、子どもが好きな私は、将来は教師になりたいと思っていました。そして、3年生の5月に大学進学を決めたのです。それ以降は受験勉強が生活の中心になり、夏以降は毎日10時間以上、机に向かいました。バンド活動に打ち込んだ経験が生かされたのでしょうか。自分でも驚くほど勉強に集中できました。

学校外の活動への理解や、物事に集中して取り組む姿勢など、現在の研究に役立つ多くのものが得られた3年間だったと思います。

グローバル化時代の人材育成を考える②

異文化と協同する力を育み
郷土への誇りを醸成する

高知県・私立土佐塾中学・高校「高知元気人プロジェクト」

グローバル化社会で活躍できる人材の育成について3号連続で取り上げる本コーナー。今回は学校事例として、高知県の土佐塾中学・高校（以下、土佐塾高校）がオバマ大統領の出身校でもあるアメリカのハワイ州プナホウ・スクールと連携して行った5日間のインターナショナルキャンプを中心とした実践をまず紹介する。

日米の高校生が
協同して地域に貢献する

ハワイ州の私立高校プナホウ・スクール (Punahou School) 以下、プナホウ)と土佐塾高校との交流事業が計画されたのは2012年7月。プナホウが日本での交流先を探していると感じた土佐塾高校が「高知に海外の生徒を招くチャンス」と、研修プログラムの策定に乗り出した。

だが、当時国際部長を務めていた藤澤佑介先生は、交流のテーマに悩んだという。それは、プナホウの要望が「日本での地域貢献（コミュニ

ティサービス)の体験」だったからだ。

「プナホウはこれまで、清掃や植林など、それぞれの地域に合った貢献活動を行っていました。そんな彼らの期待、意欲に応えるにはどんなプランが考えられるのか……熟考した末、私たちは『日本の生徒と協力しながら、高知の現状を世界に発信してもらおう』という案にたどり着いたのです。小さな地域のために国の違いを越えて協同することは世界平和を築く第一歩であり、ぜひ教育の場で生徒たちに体験させたいと思いましたが」(藤澤先生)

土佐塾高校の生徒と一緒に、県内

のさまざまな場所で見学やインタビューを行い、高知県の魅力を日米の高校生の言葉でPRするという、異文化間の協同を柱にしたプランにプナホウは共感し、13年7月の実施が決定した。

自校の生徒に期待したのは、郷土への誇りの醸成だ。

「本校の生徒も行ったことがないような場所をハワイの高校生と一緒に巡り、地域の良さを生かして頑張っている人の話を聞くことで、地元の魅力を再発見し、誇りを抱くことが出来ると思いました。生徒の多くは県外に進学しますが、どんな形であ

れ、高知にかかわり続ける人材になってほしいと思っています」(藤澤先生)

協同作業を通して深く
コミュニケーションする

「高知元気人プロジェクト」と銘打って、土佐塾高校内で参加者を募集したのは13年5月頃だ。

事前学習は、昼休みを活用した簡単な英会話の講習くらいしか時間が取れなかった。日米の生徒のコミュニケーションの質が今回のプロジェクトの成否を決めるため、双方の語学力でコミュニケーションをうまく取れるのか、最後まで不安は消えな

かった。また、プナホウの教師からも「参加者には日本語が全く出来ない者もいるが、本当に地域貢献は体験できるのか？」と実施直前まで何度も確認の連絡があったという。新しい試みゆえに、双方とも不安だったのだ。

7月末、日米双方からほぼ同数、計28人の生徒が4、5人ずつのグループをつくり、「高知元気人プロジェクト」がスタートした。土佐塾高校からの参加者は1・2年生で、海外留



高知県・私立土佐塾中学・高校
藤澤 佑介 ふじさわ ゆうすけ
教職歴7年。同校赴任歴8年目。「見通しの不透明さを教師が受け入れたことが成功の要因です」

高知県・私立土佐塾中学・高校
井田 マックス いだ まくす
教職歴1年。同校赴任歴2年目。「私にも新しいことが出来るんだという自信になりました」

高知県・私立土佐塾中学・高校

- ◎設立 1987（昭和62）年
- ◎形態 全日制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約210名
- ◎13年度入試合格実績 国公立大は、東京大、京都大、大阪大、高知大などに81人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ333人が合格。（現役のみ）
- ◎住所 〒780-8026 高知県高知市北中山85
- ◎電話 088-831-1717
- ◎Web Site <http://www.tosajuku.ed.jp/>

「高知元気人プロジェクト」概要

◎アメリカのハワイ州にあるプナホウ・スクールが、約1か月間日本に滞在するプログラムを実施。京都、広島でそれぞれ地元の高校と交流することが決まっていたが、土佐塾高校の国際部が高知県内の活動を企画し、プナホウ・スクールに提案したところ、土佐塾高校の生徒との交流が決定。「高知元気人プロジェクト」は、土佐塾高校の生徒とプナホウ・スクールの生徒が協同で実施するプロジェクトである。

■テーマ

高知を元気にしようとする人たちと出会い、彼らの活動の価値を高校生の言葉で発信する

■狙い

日本の生徒にとっての異文化に暮らすハワイの生徒と共に高知のローカルを見つめ、グローバルに発信する協同プロジェクトに取り組む。そのことによって以下の力を身に付ける。

- ①自ら課題を発見し、行動するバイタリティー
- ②グローバル社会で活躍できる国際人としてのコミュニケーション能力
- ③ローカルに対する愛郷心や自尊心

■参加者

ハワイ州の私立学校、プナホウ・スクールを中心とした生徒13人、土佐塾高校の生徒15人

■スケジュール（インターナショナルキャンプ部分を中心に抜粋）

- 7/20 プナホウ・スクールの生徒が高知に到着。
- 7/21 国立室戸青少年自然の家へ。土佐塾高校の生徒が合流。（インターナショナルキャンプ開始。昼間は県内の各地で「元気人」にインタビュー。夜間は宿舎でプレゼンテーションの準備）

日米の生徒が訪ねた「元気人」（抜粋）

- 製塩業者「田野屋塩二郎」／東京から1ターンし、高知の塩づくり名人に弟子入りし、独立した製塩業者に、塩づくりにかける思いを聞いた。
- 安田町小川地区「せせらぎの郷小川」／郷土料理の「田舎寿司」の作り方を体験しながら、過疎化が進む地域の伝統や文化について学んだ。
- 大心劇場／安芸郡安田町にある名画座。昔ながらの映画館を守る館主にその意気込みと、過疎地域に光を灯し続ける使命感を聞いた。

- 7/25 国立室戸青少年自然の家から土佐塾高校へ。翌26日にもプレゼンテーションの最終準備。
- 7/27 土佐塾高校1年生に向けてプレゼンテーション。



地元の「おばちゃん」に教えてもらいながら、高知県の郷土料理「田舎寿司」を作る



宿舎では、その日の活動をグループで振り返り、気付いたことをまとめていく

学や英語学習に興味を持つ生徒が多かったが、語学力という点では平均的な生徒が大半だった。

今回のプロジェクトでは、キャンプ中に高知県東部の「元気人」にインタビューを行い、そこで分かったことをまとめ、キャンプ終了後に土佐塾高校の1年生に対してグループごとに英語で発表する場が設けられていた。土佐塾高校の生徒にとってプロジェクトに参加しなかった仲

間に対して、プナホウの生徒にとっては外国の生徒に対してプレゼンテーションをする機会となるわけだ。「キャンプ後のプレゼンテーションは、双方の生徒にとって活動のよい動機付けになりました。『元気人』へのインタビューの後、宿舎ではグループごとに、『元気人』の話を聞いて分かったことを英語でまとめたり、翌日訪ねる『元気人』への質問を考えたりしていました」（藤澤先生）

出会った当初はやや交わりが少なかった日米の生徒だが、プレゼンテーションの準備という作業を通して打ち解けていった。だが、日米の生徒の壁を一気になくしたのは、「遊び」の時間だった。ハワイ出身で、キャンプ当日もゲームやキャンプファイヤーで日米の生徒を楽しく盛り上げた英語科の井田マックス先生は言う。「プナホウの生徒が本校の生徒にフ

晴らしいコミュニケーションツールになりました。プナホウの生徒は、自分たちの誇りであるフラダンスを教えるため、リーダーシップを存分に発揮し、本校の生徒も生演奏による本場のフラダンスに心から感動していました。後日、プナホウの生徒が『つながりがこのプログラムのキーワードだった』と振り返っていました。先生はまさにつなかりの象徴でした」

コミュニケーションを「言葉で成り立つもの」から、作業や遊びなど「一緒に何かをすること」というイメージへと生徒が深めることが出来たのは、期待を上回る成果だったと藤澤先生は振り返る。

「言葉がなくても笑い合えばつながれる」という気持ちが生まれ、その満足感の中で『もっと英語が出来れば……』という気付きを得たようです。打ち解けて、つながったから『もっと』という言葉が出てくるのだと、私たちも生徒に学びました」

楽しい環境でこそ 向上心は生まれてくる

キャンプ後のプレゼンテーション

は「教師の想定を上回る見事な出来」と藤澤先生。井田先生も「言葉も文化も違う人と一緒に、ここまでのことが出来たということは自分に対する自信になったはず」と評価する。普段の高校生活で味わうものとは別格の達成感を生徒は得たようだ。

「このままでは駄目だと不足を知ること、確かに行動の源になります。しかし、自分はこれでよいのだと確認することで、その後の行動に自信を持つことも事実です。そういう自信を持つことは、国際交流の大事な狙いの1つだと思えます。普段とは違って簡単に意思疎通できない相手だからこそ、『出来た、伝わった』という感動、そして得られる自信が大きいのだと思います。それぞれの生徒がそうした気持ちになれる工夫が出来ることが、国際交流の課題でしょう」(藤澤先生)

重要なのは「楽しさ」だと井田先生は断言する。

「楽しいから、もっと頑張ろう、努力しようと思えるのではないでしょう。日本の生徒はアメリカの生徒に比べると、『本当はこうありたい』という自分像を表に出しません。生

参加した生徒の声 1 田中友之さん(土佐塾高校1年)

情熱や価値観など、 言葉では伝えにくいものがあることが分かりました



このプロジェクトに参加したのは、高知県内の自分もあまりよく知らない場所で外国の人と交流するのが面白そうだったからです。キャンプ生活を共にすることで、英語がうまくなるかも……という期待もありました。

英語は、僕の発音が悪くてなかなか通じませんでした。でも、2日、3日と経つうちに、少しずつ打ち解けていきました。フラダンスを教えてもらった時、最初は恥ずかしかったのにだんだん楽しくなってきた。一緒に体を動かして、笑ったことで仲間になれた気がします。

高知県を盛り上げようとしている人が各地にいることを、僕はこのプロジェクトで初めて知り、そうした人たちの情熱をハワイの生徒に伝えたいと思いました。でも、どんな仕事を説明することは出来ても、思

いを伝えることはとても難しいことに気が付きました。逆境を乗り越えようとする心意気や、古いものを大切にしている日本の心など、言葉ではなかなかうまく伝えられないものがあることが分かり、もどかしさも少し感じました。

外国の人と協同作業が出来たことで、自分に自信が持てましたし、今度は自分が知らない世界に行きたいという思いが強くなりました。プロジェクトに参加したことで、自分は少し変わったのだと思います。



「高知の自然や生活を題材に歌う歌手活動もする。大心劇場館主の話聞き、彼の故郷への思いは英語では伝えきれないと感じました」(田中さん)

徒が『こうありたい自分』を素直に出せる楽しさ、安心感のある環境をつくれれば、生徒は自分で学ぶのだと思います」（井田先生）

その土地に生きる人の存在の重みに気が付いた

プナホウの生徒と県内を巡る中で郷土に対する誇りを持つという狙いも、十分に達成されたようだ。

「本校の生徒から『地図には描かれていないけれど、高知にはそれぞれ場所それぞれの人が生きているという重みを感じた』という言葉聞いた時は、心の中で『よし』とガッツポーズをしました」（藤澤先生）

「プナホウの生徒に本校の生徒が『高知にはこんなよいところがあるんだよ』と誇らしげに紹介していた姿が印象に残っています。本当は自分もそれまではよく知らなかった場所だけれど、高知県民の1人としておもてなしの気持ちを持ったのでしよう。高知に住む者の1人という意識になったのは、きっとお客様がいたからです」（井田先生）

プナホウ・スクールの次の日本訪問予定は2年後。チャンスがあれば

プロジェクトの内容を更に磨き上げ、また交流したいと藤澤先生、井田先生は口をそろえる。

「今回のフラダンスのように、今回は本校の生徒が誇りとリーダーシップを持ってプナホウの生徒に教える場面をつくりたいですね。きっと、よさこい踊りなどはびつたりだと思います」（井田先生）

「私は井田先生と『すごく楽しい時間でした』とよく振り返るんです。初めての試みで不安もありましたが、キャンプが始まってからはハワイの先生方と相談しながら、時には柔軟にスケジュールを変更し、生徒の状況に合ったプログラムにすることが出来たと思います。まさに、日米のチームでつくり上げたプロジェクトでした。ただ、生徒があれだけ打ち解けたのだから、もっと深みのある協同作業を行い、地域の人々の心に響くコンテンツにまとめ、それをウェブサイトで世界に発信できればよかったです。グローバル化社会に向けて生徒が成長できるように、私たち教師がもっととどんでいきたいと思います」（藤澤先生）

自分の「出来ないこと」に気付いたから、「出来ること」をしたいと思います



このプロジェクトに参加するまでは、高知にこれほど魅力的な場所が

あり、いろんな人が活躍していることを知りませんでした。正直、それまでは私も高知のことを、ぱっとしない田舎だと思っていましたから、神社仏閣以外にも日本にはよいところがあることをハワイの生徒に知ってもらえてよかったです。

プレゼンテーションの準備では、思った以上にチームとして協力できました。私はハワイの生徒のようにパソコンがうまく操作できなかったので、取材で積極的に質問して、分かったことを一生懸命伝えました。皆が「自分に出来ることをやろう」という気持ちだったと思います。

普段の学校生活では、極端に「自分には出来ない」と感じる場面はあまりありません。でも今回、私は英語やパソコンにかなり苦労しまし

た。そして、出来ないことがあるからこそ、出来ることはしっかり頑張らなければいけないことに気が付きました。

グループで目標を達成するために人に任せきりではいけないし、「間違ったらどうしよう」といった不安を乗り越えて行動することが大切なのだとは思っています。今までの自分は、本当は出来たのにやらなかったこともあると思います。自分ももっと変わるべきなんだと思います。



「外国の人と同じ部屋で生活し、一生懸命話し、プレゼンテーションの準備をしました。外国と日本には違いも共通点もいろいろあると分かりました」（清水さん）

グローバル化時代の人材育成を考える③

スーパーグローバルハイスクールで
育成を期待する人材像とは

文部科学省は、2014年度の概算要求に、「初等中等教育段階におけるグローバル人材の育成」のための事業予算を盛り込んだ。この中には「スーパーグローバルハイスクール(SGH)」を始めとして、グローバル人材を育成するための新しい取り組みがいくつも盛り込まれている。それらの目的と内容について、文部科学省初等中等教育局国際教育課の神代浩^{かみよ}課長に話を聞いた。

英語が使えることを前提に
自分の意見を発信できる人材

ここ数年、グローバル社会に対応できる人材の育成を強化しなければならぬという声が高まりつつあります。特に、現在の第2次安倍晋三内閣では、6月に閣議決定された成長戦略に「日本の若者を世界で活躍できる人材に育て上げる」ことが盛り込まれました。教育再生実行会議の第三次提言では、「スーパーグローバルハイスクール」や小学校英語の教科化などの施策が提言されています。こうした国を挙げてのグローバル

人材育成の動きを受けて、文部科学

省では、2014年度の概算要求に「初等中等教育段階におけるグローバル人材の育成」という柱を立てました。具体的には、「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業」「スーパーグローバルハイスクール」「社会総がかりで行う高校生留学促進事業」の3つの事業を実施することを考えています。

グローバル人材の育成という点、英語力の強化をイメージされる方が少なくありません。確かに、世界で活躍するためには相応の英語力を備えていることが必須となります。そのため、今回の概算要求にも英語教

初等中等教育段階における
グローバル人材の育成とは

◎文部科学省は、2014年度の概算要求に「初等中等教育段階におけるグローバル人材の育成」を盛り込んでいる。その内容は次の3つの事業から成る。

1つめの「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業」では、小学校英語の教科化、中学・高校の指導内容を発展させるなどの先進的な取り組みを支援する「英語教育強化地域拠点事業」、小学校における英語教育強化のための補助教材の開発などを行う「外国語活動・外国語教育の教材整備」、小中高の英語教育推進リーダーを育成する「外部専門機関と連携した英語担当教員の指導力向上事業」「外部試験団体と連携した英語力調査事業」を実施する。

2つめの「スーパーグローバルハイスクール(SGH)」では、国際的に活躍できるグローバル・リーダーを高校段階から育成することを目的に、語学力と共に幅広い教養、問題解決力等の国際的素養を身に付けるための教育に取り組む高校を指定して重点的に支援する。

3つめの「社会総がかりで行う高校生留学促進事業」では、高校生留学を促進するための経費の支援などの拡充を図る。

概算要求から財務省の予算原案作成を経て、国会で予算案が承認されれば、2014年度から各事業が実施されることになる。

育の強化を狙いとした「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業」が盛り込まれています。

しかし、私たちは、英語が使えることだけがグローバル人材に必要な要件であるとは考えていません。

例えば、日本を相手にビジネスを行う外国人が今最も関心を抱いていることの1つに、「アベノミクスによって、本当に日本経済は復活するののか」という点があります。彼らからアベノミクスに関する意見を求められた時に、自分なりの見解を述べられないようでは、外国人と対等にコミュニケーションが取れる人材とはいえません。

また、グローバル化の進展に伴い、パキスタンの人権活動家としてわ

か16歳で国連で演説を行ったマ

ラ・ユサフザイさんのように、個人の発信が世界の多くの人々の心を揺さぶり、動かすことが出来る時代になっていきます。より身近な例でい

ば、I O C総会で東京オリンピック・パラリンピック招致のプレゼンテーションを行った佐藤真海選手や太田雄貴選手。2人の英語は決して流暢ではありませんが、I O C委員の心に伝わるものがありました。

彼らのように、社会を取り巻くさまざまな問題に目を向け、それらについて深く考えた上で自らの意見を広く発信し、多様な文化、専門技能を有する人たちと協力しながら問題解決へ導いていく力を持った人材、それこそがグローバル人材であると

私たちは捉えています。

初年度は100校を予定 スーパーグローバルハイスクール

今回打ち出した施策の中でも、グローバル人材を育成する上で最も中心となる事業が、「スーパーグローバルハイスクール(以下、SGH)」です。

SGH事業は、授業などで英語を用いて活動する機会の拡充、先進的な人文・社会科学分野の教育の重点化などに取り組む高校を指定し、質の高いカリキュラムの開発・実践やその体制整備を支援するものです。概算要求の段階であり、まだ確定していませんが、14年度は全国で100校を指定し、1校当たり2900万円を支援する予定です。事業要項の作成や説明会の開催は政府予算案が決まってからとなるので、15年1月以降となります。対象校の指定開始はおそらく5〜6月になると思います。

SGHに指定された高校に育成してほしい生徒像は、語学力と共に幅広い教養や問題解決力などの国際的素養を備え、将来は政治や経済、法

律、学術などの分野で活躍すること

が期待される、グローバルリーダーの卵です。単に英語教育や国際交流に力を注いでいるだけでは対象になりません。例えば、「総合的な学習の時間」などを活用して社会的な問題についての課題研究やディスカッション、プレゼンテーションに取り組んだり、企業やNPOなどが主催している教育プログラムやインターシップなどに積極的に参加したりしている高校などを想定しています。

そうした取り組みを行う際に不可欠となるのが、学校外の教育資源の活用です。校内の先生方だけでグローバル・リーダーの卵となる生徒を育てようとしても限界があります。例えば、環境問題について英語でディスカッションをするという場面では、大学の研究者や実際に海外での活動経験を持つ方に協力を依頼する必要もあるでしょう。また、前述のように、企業やNPO、国際機関などが実施している教育プログラムやインターシップを活用するのも効果的です。先日、ある旅行会社から次のような問い合わせがありました。その会社では毎年、日本、韓国、シンガポ

*この記事は、2013年10月に行ったインタビューを基に作成しています。

ルの高校生でチームを組み、新たな旅行ツアーを提案してもらうコンテンツを開発しているそうです。ところが、日本の高校の参加数が伸び悩んでいるので、何か良い方法はないかと相談してきたのです。

この会社のように、CSR（*）の一環として、高校生向けの教育プログラムを持つ企業は少なくありません。ところが、長らく教育の世界では、学校が企業の支援を受けることを避ける意識が強かったのではないかと思います。そのため、せっかくの優れたプログラムが有効に活用されていないケースが見られます。

企業が主催している活動であっても、公益性が高く効果が認められる教育プログラムであれば、今後は学校ももっと積極的に参加するべきだと思います。これはまだアイデアレベルですが、SGHに関する説明会を開く時には、教育委員会や学校関係者だけでなく、企業やNPO、大学、研究機関の方々も招いて、双方のマッチングの場にもすることも検討しています。

もちろん、教育の成果に対して最終的な責任を持つのは、それぞれの

学校です。しかし、その過程においては、このような外部の教育資源を大いに活用してほしいと思います。学校や地域の特性を踏まえて、さまざまな教育資源を有機的に組み合わせながら、生徒のグローバルな意識や視点の養成、国際的な課題に取り組める能力の育成に結び付けていく。そうした構想力、創造力、実践力を持つ高校をSGHに指定したいと考えています。

なお、SGHについては、国際バカロレア認定校との関連性についての問い合わせも数多くいただいています。これは基本的に別物と考えてください。国際バカロレア認定校とSGHはイコールではありません。ただし、将来的に国際バカロレア認定校になることを目指して、独自のプログラムを実践しようとしている高校をSGHに指定することは想定しています。

また、例えば、理数科でスーパーサイエンスハイスクール（以下、SSH）に指定されている高校が、普通科についてはSGHの指定を受けるといふように、SSHとSGHの2つの指定を同時に受ける高校が出

「スーパーグローバルハイスクール」事業内容

■事業概要

国際化を進める国内外の大学や企業、国際機関等と連携を図り、外国語（特に英語）を使う機会の飛躍的増加、先進的な人文科学・社会科学分野の教育の重点化等に取り組む高校等を「スーパーグローバルハイスクール」に指定し、質の高いカリキュラムの開発・実践やその体制整備を支援

■支援対象期間

2014年度から5年間

■支援対象学校

国公私立高校、中高一貫教育校（中等教育学校、併設型および連携型中学校・高校）

■支援規模

1校当たり2900万円。2014年度は100校を指定予定

■主な取り組み

- 人文科学・社会科学分野の先進的な教育課程の開発・実践（教育課程の特例の活用を想定）
- グループワーク・ディスカッション、調査研究・論文作成・プレゼンテーションの実施（英語によるものも含む）
- 国際的素養を身に付けたグローバル・リーダーの育成を図る指導方法の研究・蓄積
- 帰国・外国人生徒の積極的受け入れ
- 海外研修など海外の高校・大学との交流機会の充実
- 外国人教員の活用（「新・お雇い外国人教師」）

■大学との連携

- 人文科学・社会科学分野の教員や、帰国・外国人教員の派遣
- 入試の改善による生徒の学習内容の適切な評価
- 単位認定を含む高大連携プログラムの提供

出典／文部科学省「平成26年度概算要求説明資料3」

てくるケースもあり得ます。

誤解しないでいただきたいのは、SGHは決して全国のトップクラスの進学校だけを対象とした事業ではないということです。地元の産業や文化、自然環境などの教育資源を生かしながら、ローカルとグローバルの双方の視点を持った生徒を育てることを目指して努力している地方の高校も十分指定の対象になり得ますので、ぜひ名乗りを上げていただきたいと思えます。

短期留学者にも 学校単位で資金を援助

今回打ち出した施策の中では、「社会総がかりで行う高校生留学促進事業」も高校に直接関係する事業です。これは、若者の内向き志向が指摘される中、早い時期から海外体験を積み重ねることを目的とした事業です。13年度は1年間の長期留学に行く高校生300人に1人当たり40万円を

* corporate social responsibility の略。企業の社会的責任の意味

支給しましたが、14年度はこの枠を400人に拡大するだけでなく、2週間以上1年未満の短期留学者に対しても、3200人を対象に1人当たり20万円の支給を目指して、概算要求をしています。短期留学に対して国の支援金を要求するのは初めてです。また、これとは別に、各自治体にも独自の留学支援事業の拡充を求めたり、企業から留学資金の寄付を募ったりする予定です。そのようにして、国・自治体・企業が一体となって高校生の留学の機会を増やしていくという意味で、「社会総がかりで行う」という事業名をつけました。

長期留学だけではなく短期留学も支援の対象にしたのは、多くの高校生にとって長期留学はやはりハードルが高いものであるからです。しかし、例えば1学期分だけ海外の高校に在籍して授業を受けたり、夏休みなどに2〜3週間程度高校生向けに開催されている大学のサマープログラムなどに参加したりするのであれば、行ってみたいと思う高校生も多いのではないのでしょうか。短期留学については学校単位で応募することとし、留学先および留学する生徒の選定か

ら生徒への事前指導と事後のケアまでを確実にける学校を支援対象にしたいと考えています。

高校生にとって、海外経験は、たとえ短期であっても世界に目を向ける貴重な機会となります。留学先で言葉が通じない経験をしたり、日本とは異なる価値観や文化に触れて、良い意味でのショックを受けたりすることが、日本に戻ってからの学習意欲の向上に結び付くと期待しています。

明確な目標設定を行い 教員の英語力向上を図る

「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業」は4つの事業に分かれ、このうち高校の先生方に特に知っておいていただきたいのが、「英語教育強化地域拠点事業」と「外部専門機関と連携した英語担当教員の指導力向上事業」です。

小学校英語の教科化が打ち出される中、小学校・中学校・高校を通じて系統立った英語教育の課程編成が課題となりつつあります。そこで「英語教育強化地域拠点事業」では、英語教育強化地域に選定された小・中・

高が、各段階でどのような指導や評価を行えば、児童・生徒の英語学習に対する意欲・関心や英語運用能力が高まるのか、先頭を切って取り組んでほしいと考えています。例えば、高校では「CANDOリスト」の形で学習到達目標を設定し、これに基づく指導・評価が広がりつつあります。このような指導法を中学校でも実践することで、中・高の指導の連続性を高め、目標・内容の高度化につながるヒントが得られるかもしれません。あるいは、地方の公立高校の中には地元の中学校から多くの生徒が入学する学校もあります。そうした高校が近隣の小・中学校と連携し、小学校から高校までの系統的な英語教育を実践的に進めていただくことなどを期待しています。

「外部専門機関と連携した英語担当教員の指導力向上事業」では、イギリスの非営利団体ブリティッシュ・カウンシルなどの外部専門機関の協力を得ながら教員の研修を実施し、小・中・高における英語教育の推進リーダーを育成することを目指します。第2期教育振興基本計画において、高校の英語担当教員のうち現状では

50%強しかいない英検準1級程度以上取得者を、5年後には75%にまで増やすことを目標にしています。この取得率についての調査データを都道府県別に公表し、各県の教育委員会に目標達成を目指して取り組んでいただくことも考えています。教員の英語力向上が、英語教育の質を高める上で欠かせないと考えるからです。更に、こうした取り組みが生徒の英語力の向上に結び付いているかどうかを検証する仕組みを構築することも重要です。「外部試験団体と連携した英語力調査事業」は、GTECや英検などの英語力調査の実施団体と連携し、生徒の英語力を把握・分析・検証するための調査方法についての研究開発を行うものです。

このように、文部科学省では次年度以降、さまざまな事業を通じて初等中等教育全般にわたってグローバル人材の育成を目指します。高校の先生方におかれましては、是非このビジョンへのご理解をいただき、「自分たちの高校から世界で活躍する人材を育てる」との気概を持って意欲的にチャレンジしていただくことを期待しています。

主体性の育成には、教師が生徒に向き合い、考え続けることが必要

生徒の主体性を育てる手段にマニュアルはない。教師がさまざまな事例、同僚の指導などから学び、常に生徒に向き合って考え続けることが必要ではないか。そう考える中、10月号の特集で紹介されていた事例はそれぞれ参考になった。静岡県立池新田高校の「最初は褒めるが、続けて褒めない。もっと上を目指したいと思う言葉を選ぶことを大切にしている」という言葉に、自分も改めて気を付けたいと思った。神奈川県の木村剛先生と鳥取県の福島卓也先生の「学習の量より質が大切」という指摘は、私自身、量で迫る必要がある層と量から質へ転換させなければならぬ層の見極めが難しく、質に切り替える難しさを実感しているところであり、いろいろ考えさせられた。

〔愛知県・匿名希望〕

学校全体での授業改善の努力、主体性を促す声掛けに感銘

現場で学力の多層化を痛感する中、10月号の特集を読み、主体性の育成をどう実践するのかを改めて考えさせられた。特に、広島県立広島中学・高校の事例で、生徒に求める前に、教師の方がまず授業改善の余地がないのかを考え、高い水準の授業を求めて努力し続けていることに感銘を受けた。面談では褒めて励ますことを基本とし、そのような声掛けを繰り返すことによって、生徒自身が自分に足りないものを自ら探すことが出来るようになっていく。生徒が主体的に学習できる仕掛

読者のページ

Reader's VIEW

Volume 5

読者の先生方からのご意見を紹介します

けを、声掛けによって実践している。特定の教師だけでなく、全ての教師がそれらを実践することで、学校の強みとなり、生徒は教師を信頼して受験に臨めるのだと感じた。

〔東京都・私立東京農業大学第一高校中等部・

小堀健一〕

ICTや模試の活用を自校にも広めたい

いつも、「指導変革の軌跡」の各校の入試合格実績を参考に、勤務校の参考になる項目をノートに書きとめている。10月号に掲載された新潟県立新潟高校は、自校とは異なる点も多いが、ICTによる授業の効率化が参考になった。現在、ICTによる反転授業などが行われるようになっていっているので、それについても実例を紹介してほしいと思った。また、石川県・私立北陸学院中学・高校の事例では、模試の問題を分析し、授業進捗や内容が適切だったかを確認し、次の模試までの計画を立てて授業を行うことに共感した。スタディーサポートや模試の成績が思うように伸びないことを、未履修範囲があることだけに帰結させるようではいけない。ICTと模試活用について、自校の会議で今後訴えていきたいと思う。

〔大阪府立みどり清朋高校・中村泰造〕

教師川柳

夏長しやっぱり無理か秋入学

福島県・臥煙

子どもは未来

ベネッセ教育総合研究所は、
子どもたちの成長に寄り添う研究と
社会への発信を通して、
一人ひとりが学びに向かい、
今と未来を“よく生きる”ことに
貢献することを目指しています。

ベネッセ教育総合研究所

編集後記

◎今号の特集では、山梨県立甲府南高校を取り上げさせていただきました。山梨は、実は私の故郷でもあります。初めて故郷で仕事をすることだけで胸躍りましたが、取材後の雑談の際、取材にご協力いただいた三枝先生に、私が山梨出身であることを告げると、私の出身校でもご勤務されていたことが判明。残念ながら、私の入学した年に別の学校にご異動されたとのことでしたが、私が教わった先生方もよくご存知で、「私の担任はA先生でした」「B先生は今、C高校の校長だよ」といった会話をしながら、20年近く前の当時をお互いに懐かしみました。(柏木)

VIEW21 12月号 Vol.5

2013年12月6日発行

発行人 岡田晴奈
編集人 谷山和成
発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
印刷製本 凸版印刷(株)
編集協力 (有)ペンタコ
執筆協力 中丸満、二宮良太、長谷川敦
撮影協力 荒川潤、ヤマグチイキ
イラスト協力 カモ
情報編集室
〒206-8686 東京都多摩市落合1-34
電話 042-311-3390

©Benesse Corporation 2013

VIEW21

2014
February
2月
Volume 6

次号は
2月14日発行(予定)
〔VIEW21〕高校版は
年6回の発行です

熱血と笑顔の相乗効果

表紙の学校

栃木県立矢板東高校 松本秀則先生

2012年度に附属中学校が開校した栃木県立矢板東高校。多くの生徒が大学に進学する地域の進学校だ。1学年主任を務める松本秀則先生は、今年の学年テーマを「成長」とした。その根底には、「中学生から脱皮をし、今までとは違う自分を見付けてほしい」という思いがある。「高校時代は『自分って何だろう』と自分に向き合い、自分の根っこをつくる大切な時期です。だからこそ、学びたい学問やなりたい職業を中学生の時の視野で選ばずに、社会に触れながら多くの可能性を探ってほしいと思います」と語る。

そのために、生徒の希望を「一度崩す」ことを意識する。視野を広げるため、大学のシンポジウムなどを案内し、最近では、卒業生や保護者、大学教授など、さまざまな分野で活躍する人と話す機会を設けている。「多くの人の体験を聞くことで、生徒は『自分はどうなのか』と自問自答することでしょう。また、初めて会う人とのコミュニケーションでは、自分の考えを明確にしないと『伝わる言葉』にはなりません。多くの出会いが、自分を見つめる機会になるのです」

もっと生徒の想いや不安を聞きたいと、「待つこと」も意識する。面談でも答えや歩むべき道を示したり、決断を急がせるのではなく、「なぜその職業に就きたいのか」「社会にどう貢献したいのか」など、生徒が自分自身とじっくり向き合えるような質問を投げ掛ける。

生徒にとことん寄り添う松本先生の熱意の源は、何といても生徒の笑顔だ。生徒集会では「君たちの笑顔が見たいんだ」とストレートに語り掛ける。そんな松本先生を「熱血先生」とはじけるような笑顔で言う生徒たち。「熱血」と「笑顔」の相乗効果で、生徒は日々成長を重ねている。

VIEW21

2013 December ● Vol.5

ビュー21 12月号 / 2013年12月6日発行 / 通巻第343号

発行人 岡田晴奈 編集人 谷山和成

発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所

©Benesse Corporation 2013

お客様サービスセンター

【フリーダイヤル】

0120-350455

受付時間(祝日・年末・年始を除く)

月～金 8:00～19:00 / 土 8:00～17:00

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社

〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17